

---

# 仮面ライダーオーズ 旅人と理由と二人のライダー

青空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーオーズ 旅人と理由と二人のライダー

### 【Nコード】

N3907V

### 【作者名】

青空

### 【あらすじ】

火野 映司<sup>ひの えいじ</sup>。彼は仮面ライダーオーズとして、人々の欲望を暴走させる存在、グリードとの戦いの日々を送っていた。

そんな彼の前に、仮面ライダーバースという戦士に変身する男、伊達<sup>だ</sup>明<sup>あきひ</sup>に、自身が戦う理由について、このように言われてしまう。

『何も無しに、戦っていることの方が、よっぽど不気味で気持ち悪い』

その言葉を聞いた映司は、自分自身の戦う理由を見出せなくなっていく。

その最中、自分に自信をもてなくなっていた映司の前に、一人の男が現れた……

自分自身と正面から向き合った時、映司が導いた答えとは……？

## 001（前書き）

こちらの作品を御覧になる前に以下の注意点をお読みください。

### 「注意点」

- ・ 本作は本編オースの第18話と第19話の間の物語を描いたものです
- ・ 二次設定が多々含まれている描写がございます
- ・ 状況によっては、伊達さんの扱いが悪くなることもございます
- ・ 時系列を遵守するようには致しますが、時系列を守らない描写を描く可能性もございます。

これらの一つでも気に食わない場合は『戻る』ボタンでお戻りください。

ご了承くださいただの方は、どうぞお楽しみください。

遠くのほうで、声がする。

気が、遠くなるほど遠く。自分の目では見えないような場所で、誰かが泣いている声が聞こえる。

- - 誰の、泣き声？

知っている。

自分はそれが誰かなのか知っているのに、それでも訊ねる。

答えが分かっているのに、なぜそのような真似をしたのか。そんなことは自分自身にさえも、分からなかった。

「……………」

自身を包み込む暗闇の中で、その人物はうつすらと目を開けた。

「……………っ！」

燃え上がる、巨大な建造物。

燃え上がったものから舞い上がる、黒色の煙。

そして、未だに腹が満たされんと言わんばかりに、あらゆるものを飲み込もうとする巨大な炎。

- - その中で動く、小さな影があった。

浅黒い肌の、4、5歳程の少女だった。巨大な炎の余波を受けたのか、彼女の肌は軽く黒ずんでいた。

それに、彼女の傍にいた父親や母親、兄弟達の姿が見当たらない。しかし、その答えは一瞬ででた。

感情を映し出す純粋な瞳から。

大きな、涙がぼろぼろと零れていたから。

「……………っ!」

涙を流し続ける少女の近くにあった、建造物の一端が炎によって耐久性を失ったのか、少女の下へと落ちてくる。

- - その最中、全ての世界が時の流れを遅くした。

今すぐに、かけつけなければならないのに。

かけつけて、救わなければいけないのに。

自分自身でさえ、その行動を遅くさせられていた。

少女を助けたい思いと、体を動かせない思い。その二つに挟まれた自身は、結果、懸命に手を伸ばすことしかできなかった。

遠くにいる、その少女を。

絶望に満ちた表情で、涙を流し続ける少女を。

ほんの僅かでも、自身の傍へと引き寄せるために、懸命に手を伸ばす。

- - しかし、その行動は遅すぎた。

建造物の一端が落ちるとともに、爆発によって更に大きさを増した炎が自身の視界を埋め尽くした。

苦しそうにもがきながら、それでも伸ばせる限り手を伸ばす。

その光景が最後に、流したものの。

- - それは、耳元で流れる、少女の泣き声だった。

「ハアッ……ハアッ……！！」

そこで自身 - - 火野<sup>ひの</sup> 映司<sup>えいじ</sup>は目を覚ました。

全身から、吹き出した汗が寝巻きを肌に張り付かせ、派手に暴れた自身の前髪をまくしあげ、額の汗をぬぐう。

「また、あの夢か……」

ボソリと、つぶやく映司。カチリカチリと音を立てる時計の針の音が、やけにやかましく響いていた。

「いらっしやいませ……」

「本日は、インドネシアグルメツアーとなっております……！」

「席にご案内しますね」

通称、コスプレ料理店と名高い評判を受けた多国籍料理店、クスクシエ。

その扉を開けた数名の人物達を待ち受けていたのは、奇妙なコスプレをした2人の男性と、1人の女性だった。

うち、1人は映司。その服装はインドネシアのバリ島民族の衣装を身にまとっていた。足腰まで届く長い布を巻きつけたその上から、ふくらはぎあたりまでの長さの布を巻きつけ、上半身は白いジャケ

ツト、頭部にはジャケット同様の白い布を巻きつけていた。

もう一人の男性は、後藤 慎太郎。

彼はもともと、鴻上フアウンデーションという世界に匹敵する巨大財団内にて設立された戦闘部隊の部隊長を務めていた男だった。というのも彼は、自身のトレーニング中に行き倒れてしまった。その行き倒れた先がここ、クスクシエだった。

鴻上フアウンデーション内でもいくつかのいざこざがあったために、彼は心の整理と助けてもらった恩返しのためにこの店のアルバイトとして働いている。

そのため、彼もインドネシアの民族衣装のひとつ、パンジャビという衣装を身にまとっていた。反射性の高いねずみ色のズボンと、ひざほどまで裾があり、丁寧に刺繍を施された紺色の上着、さらには水色に近い青色の帽子を頭にかぶせ、接客するうえでは少々固い笑顔を浮かべながら、客を席へと案内させている。

そして、もう一人。この店唯一の女性店員である、白石 知世子。いわずと知れた、この店の店長である。世界を見るために自身の足で世界中を旅行してきた逞しさ溢れる女性であり、面倒見もよいため映司や慎太郎の姉御的な位置に存在している。この店にて、こういった振る舞いをしているのは、彼女が見てきた世界を体感してもらおうというのがこの店のコンセプトらしい。

彼女も映司と慎太郎同様、サリーと呼ばれる民族衣装を身にまとっていた。左肩から、右の脇腹まで通された布が服のような形状で、彼女の足首あたりまでを余すことなく包んでいる。そんな衣装のま

ま、知世子は厨房に入り、早速料理の支度にとりかかっていた。

「フン……毎度毎度、よくこんなことが続けられるなあ……」

そして、店の片隅で悪態をつく一人の青年。金髪の髪を左右に分けた容姿は見るからに柄が悪そうである。店の隅のテーブルでふんぞり返っている尊大な態度は、彼の性格を充分に表しているのだろう。

彼の名は、アंक。彼も映司や慎太郎同様、クスクシエの居候の一人である。彼にはある秘密があるのだが、それは後々語るとしよう。

「アंक、お前店の手伝いをしないんなら、奥に行けよ。お客さん沢山来てるから、席が足りないんだ」

「知ったことが。どこにいるのかは、俺の勝手だ」

手に持ったアイスクャンデーを頬張りながら、その場所を頑として動こうとしないアंक。いつもよりもご立腹なのか、言葉の節々がいつもに増して刺々しい様子だった。何を言っても無駄だと判断した映司は、苦い顔をしながら接客の業務に戻っていく。

「こんにちはー」

「あら、比奈ちゃん。いらっしやい。もう学校終わったの?」

「はい、今日の授業は二人とも午前中までだったんです」

クスクシエと扉が開かれ、ここのアルバイトである泉比奈と彼女の同級生らしい女性が入ってきた。

泉 比奈。近場の服飾系専門学校に通っている彼女は、学校が終わって余程のことがない限りはこの店の手伝いに来ている。今時の女子だけあって、それなりの賃金が必要な年頃でもあるが、ここに在住しているアंक - 否、アंकに取り付かれている人物の面倒をみるためでもあった。

泉 信吾しんご。それがアंकに取り付かれている人物の名前であり、比奈の兄の名前である。とある事故に巻き込まれ、瀕死の重体となつた彼の体を、アंकが取り付いてしまったのである。

アंकのおかげで、なんとか信吾は死なずにすんでいるが、非常に短気で、かつ信吾の体を丁寧に扱わないということから、その監視を行うために、比奈はここに通いつめているというわけだ。

「それで、こちらのお嬢さんは？」

「あ、私の中学生の時の友達です」

「園碕そのさき 璃朱りすって言います」

知世子が、比奈の連れてきた女性、璃朱な話しかけると、彼女はお辞儀をしながら自己紹介をする。

「今日、学校の帰りにたまたま会って、ここでバイトをしてるって言ったら、ぜひとも行きたいってことだったんで……」

「そうなんだー、あ、じゃあこちらの席にどうぞ」

比奈の説明で納得したのか、知世子は璃朱を席に通す。比奈は支度をしに、奥に行こうとしたとき、厨房の料理を運ぼうとしていた映司を呼び止めた。

「あの、映司くん」

「どうしたの、比奈ちゃん？」

「店が一段落ついてからでいいから、璃朱と話してほしいんだけど……」

「比奈ちゃんのお友達と？」

「うん、彼女、今日ここに来たのはそれが理由だから……」

比奈の言葉が終わると、映司は厨房から彼女の姿を見た。

比奈と同じぐらいの背丈で、二の腕にかかるほどの長さの髪。

第一ボタンをとめていない深緑色の長袖のカッターに、黒と白のチェックのミニスカート。

足首の上あたりまでの黒いブーツを履いている少女を、映司はこれまでに見たことがなかった。

（とりあえず、今は店の手伝いに集中しよう……）

そう心に決めた映司は、満席となった店内にいる客人達の注文を片っ端から聞き集めていた。

・ ・ ・それから、二時間後。比奈が手伝いに入ってくれたこともあり、ようやく店内にいた客はなくなった。映司、慎太郎、比奈は待ちに待った休憩時間をもろう。

「璃朱ちゃん、ごめんね。待たせちゃって」

「ううん、気にしないで。比奈」

休憩時間に入るや否や、店の片隅にあったテーブルに座ってもらっていた璃朱のもとへと向う比奈と映司。知世子は三人のためにお茶とお菓子を用意し、慎太郎は気を利かせ席を外しているが、そんなことはどうでもいいと言わんばかりにアंकはその場から離れずに、本日十二本目のアイスクャンデーを頼張っていた。

「ううん、こっちこそ無理聞いてもらってごめんね」

申し訳なさそうに、比奈に言う璃朱。

「気にしないで。映司くん、改めて紹介するね。こちら、中学校からの友達で、園碕 璃朱さん」

「園碕 璃朱です。初めまして」

「初めまして、火野 映司です。」

「突然押しかけて、すいません」

「いいよ、気にしないで。それより、俺に話があるってことだったけど……」

簡単な挨拶を済ませ、映司は早速本題に入る。すると璃朱はバッグをガサガサといじり、中から一枚の紙を取り出すと、それを映司に渡した。

『神秘に包まれたパワースポット 世界に広がる未知なる力』

映司が渡された紙には、でかでかとそのような文字が書かれていた。その隅には、『世界パワースポットベスト5』、『私が選ぶ！！おすすめパワースポット』などといった、パワースポットに関することが細かく掲載された紙だった。何枚か掲載された写真もおそらくパワースポットのいくつかのものであることは間違いないだろう。

「『執筆者：園崎 璃朱』……って、これ璃朱ちゃんが書いたの！？」

「はい、対したものじゃないんですけど……」

驚きながら、璃朱の顔を見上げる映司に、璃朱は控えめに応える。

「璃朱ちゃん、新聞部に入ってて、校内でいくつも記事を書いているの。それが日売新聞の人に好評をもらって、特別賞貰ったんだって」

「へえ、そうなんだ。璃朱ちゃん、すごいなあ」

「そ、そんなことはないです……たまたまですよ……」

比奈の説明を受け、純粹に璃朱を尊敬する映司の言葉に、照れくさそうに言う璃朱。

「あの……それで、本題なんですけど……」

「ああ、ごめん……どうぞ、続けて」

脱線しかけていた話をなんとか元に戻す璃朱。映司も色々と話したいこともあったが、それはひとまず置いておくことにした。

「実は私、次の新聞でもパワースポットに関する特集を書こうと思いついて、それで今度は実際に現地に行つてパワースポットを体験してみたいと思うんです」

「……直接、行つて……？」

「はい。私の文章は、あくまでもその特集を書いた人達が体験したことについてをまとめてみただけのものがほとんどなんです。それがたまたま結果として、多くの人から共感を受けたことが切欠で、賞を頂いたんですが、自分で実際に体験した記事だったら、自分自身も納得できる新聞が書けると思っています」

「なるほど……」

「それで、比奈に相談したら、火野さんは世界の色々な所を旅してきたつてことを聞いて……それで、もしかしたら、そういつたスポットのこと、何か知ってるかもつて思つて……そこに行つてみて、実際にそういつた力に触れてみたいつて思つたんです」

比奈の名前が出されたので、比奈の方を振り向くと彼女は気まずそうに視線を反らした。本人に無断で本人のことを話したあげく、勝手に約束を取り付けてしまったことに責任感を感じているのだろう。とにかく、彼女が初対面なのにも関わらず自分に用があるといったことに、映司は納得した。いきなりであったのだが、わざわざこのような所まで来てくれたのにも関わらず、ただ帰れと言うのは失礼すぎると、映司は思う。

そのような結論に至った映司は「うーん」と唸りながら、今まで旅してきた場所を思い出す。

そして、およそ一分ほど唸り続けた結果、映司はこう言った。

「ごめん、パワースポットってなに？」

パワースポット。

簡単に言うのであれば、それは不思議な力が満ち溢れた土地を示しており、その土地に行けば健康運、金運、恋愛運などが上昇したり、生命力が増加したり、はたまた気分が穏やかになるなど、科学では証明ができない力が満ち溢れた場所だ。

近年、そのような場所があるとメディアなどで特集されて以来、世界各地でそのような土地を観光地とした動きが広がり、今では完全に各国の名物となった場所も数多く知られている。

一説では、たまたまそのように感じた人がその場所に畏敬の念がこめたことが切欠で、それが長年積み重ねられてきたことにより、その力が満ち溢れた。結果的には、その土地を訪れた人の想いが大きく積み重なったことによるものとされている場合もあるが、こういった謎に満ちた場所には、肯定的な意見や否定的な意見も数多く寄せられている。

「へえ、パワースポットってそんな効果があるんだね……」

璃朱による約10分間のパワースポット講座を受け終えた映司の発言がそれだった。なにせ、明日を生きていくためのアルバイトを探し回るのに必死であったので、肝心のメディアをチェックする機会があまりなかったのだ。……そう思うと、社会情勢も全く知らずアルバイトを続けていた映司の逞しさは相当のものであるということも伺えるのだが。

「ええ、私も最初は興味本位でパワースポットに関して調べ始めたのですが、最近ではパワースポットについて悩みを解決する人が増えている、ということも耳にしました。ですから、こういった情報が少しでも伝わって、皆さんの悩みを少しでも支えたいって思っています」

彼女の理想に、映司は感動していた。

年頃の少女である彼女は

様々なことに関心を示すだろうし、自分本位の活動を主にすることが多いはずだ。

しかし、中間的な立場でパワースポットを訪れようとしている彼女は、畏敬の心をきちんと持った上で訪れるのだろう。そして、その

土地を冒読するような記事を書くようなことはしないだろう、と映司は考えていた。

ところが、実際に映司はそう感じたスポットはどこにもなかった。

「悪いけど、俺が行ったことのある場所には、そういった場所はなかったかなあ……俺、別の目的があって旅してたから」

正確に言えば、映司は異なった目的を持って世界各地を旅をしていたのである。

目的が違ってくる以上、パワースポットのように特殊な感想を抱かせるような場所に焦点を向けることもないのは、無理もないことだった。

そして、その旅の目的を知っている人物は、映司以外、誰もいない。映司自身が、誰にも話そうとしないからということも、関係しているからなのだろうが。

「そうですか……分かりました」

「ごめんね、せっかく来てくれたのに何も話せなくて……」

「いいえ、私の方こそごめんなさい。急に押しかけたりして」

身支度を整える璃朱と、交互に話し続ける映司。

やがて、立ち上がると璃朱は店の入り口まで歩いていく。

「それじゃあ、お邪魔しました。比奈、またね」

「うん、またね」

「じゃあ、気をつけて帰ってね」

比奈との挨拶を済ませた璃朱に、映司が話しかける。それに無言で頷いた璃朱は、静かに扉を開けて出て行った。

「ひさしぶりだなあー、日本」

その男は、久しぶりの故郷に足を踏み入れていた。世界中を旅してきたその男がこの国を訪れたのは何年ぶりだろうか、全身を使って空気を吸い込み、勢いよく息を吐く。

都会らしさを表す、少々薄汚れた空気が男の鼻をくすぐる。その都会をよく知っている男は顔に微笑を浮かべていた。

「さて、懐かしさに浸るのはこれくらいにして、そろそろ行きますか！ー」

男は一人気合を入れ、近くにあったバイクにまたがる。

キーを勢いよく回すと、バイクのアクセルがかかる。そして、そのまま慣れた動きを行うと、その男とバイクは夜中の都会へと消えていった。

璃朱がクスクシエを訪れた翌日の日曜日。映司は、買い物で、近く  
のデパートに出掛けていた……余談ではあるが、今彼は預かったお  
金をきちんと財布に入れていた。

彼の買い物の内容は、明日のクスクシエのメニューの材料である。

「今週は、山のある地域特集よ！」と知世子が騒いでいたからで  
あるが、そのチョイスが「ブルーマウンテン」という、またマニア  
ックなものだった。映司でさえ知らない、ブルーマウンテンの料理  
を知世子が知っていたのは、流石と言うべきなのだが、そこは触れ  
ないでおこうという暗黙の了解が映司、比奈、慎太郎の間で成立し、  
現在に至る。

ちなみに、比奈は知世子と一緒に店の飾り付けを手伝い、慎太郎は  
店の中と外の掃除。アंकに関しては……言う間でもないだろう。

現在、映司がいる場所は、クスクシエとデパートの中間点ほどの場  
所にある運動公園、時刻は、午前十一時を少しまわったところ。比  
奈から貰ったマフラーを首に巻き付けているとはいえ、まだまだ暖  
まっていない気候が肌に染み渡る。

映司は公園の中を見回す。しかし、『子供は風の子』という言葉は  
どこへやら、公園の中を走り回る子供は見当たらず、広場でゲー  
トボールを行う老人達の楽しそうな声が聞こえてくるのみだ。今の子  
供達には、『こたつで丸くなる猫』という表現の方がしっくりくる  
なと思いつつ、映司はデパートへと足を急がせる。

「あれ？」

二、三步踏み出した時、映司の足が止まる。

映司の視線の先には、一人の少女がいた。薄い小型のデジカメをのぞき込み、昨日見せたものとは全く異なった表情を見せていた。

彼女の人差し指に、力が込められ、カメラのシャッターを切る。それと同時に、彼女の視線の先にあった白いハトが一斉に飛び散っていった。

そんなことにも目をくれず、少女は撮った写真を確認する。そこには、まさにこれから羽ばたこうとする白いハトが写されていた。

「いい写真、撮れた？璃朱ちゃん」

「あ、映司さん。バッチリ撮れましたよ！」

小さくガッツポーズをしていた璃朱に話し掛ける映司。すると、璃朱は先程撮った写真を自慢げに映司に見せてきた。

「確かに、よく撮れてるね。璃朱ちゃん、新聞も上手に書けるうえに、写真を撮るのも上手なんだね」

「そんな、たまたまですよ……」

あくまでも謙遜する璃朱に対し、映司は純粹に璃朱をほめたたえ続ける。「他の写真もみていい？」と言いながらも、デジカメの使い方が不明なため、結局、璃朱が操作しながらの、写真閲覧会となっ

たのは、余談に留めておこう。

「もともとは、写真を撮ることが、私の趣味だったんです」

自分が撮影した写真を映司に見せながら、璃朱はポツリと言う。

「え……？」

「私が、まだ小学生の時に、父のカメラを借りて写真を撮ったことが切欠でした。撮ったものは、道端に咲いた小さな花だったんですけど、それでも一瞬しかない風景をこうやって形に残せることが、すごく楽しかったんです」

大切な思い出を抱き締めるように、璃朱は柔らかい表情で話す。そんな彼女の一言一言に、映司は聞き入っていた。

「その写真を父に見せた時、父は私のことを誉めてくれました。滅多に表情を変えなかったけど、私の写真を見て、凄く安らかな顔をしていたんです」

「……」

「それから、私は色々な光景の写真を撮るようになりました。こんな私が撮った写真でも、人の心を安らかにすることができる。誰かのために何か出来るって、心の底から思えたんです。ただ、そう思った思いで撮っても、がむしゃらに撮った写真じゃ、『何も感じない』って友達に言われて……」

「だから、パワースポットっていうのを知ったんだね」

映司の問い掛けに、璃朱は無言で頷いた。

「沢山の人が、畏敬の心を沢山浴びせ続けていた場所……人の思いが、結果的に人の心を穏やかにしているってことなんじゃないかって思ってたんです。だから、そういった場所に行ってみれば、人の心が穏やかになれる理由を肌で感じられるんじゃないかって、思ってた……」

璃朱は、そう言う手の中にあるデジカメを軽く握りしめる。

そんな彼女の表情が意味するものを、映司はよく知っていた。

- - 夢を叶えたいと願う、切実な思い。

誰の心にもある、純粹で、切ない思い。

それが手に取るように判ったのは、映司もその思いをよく知っていたからだった。

「……私、変なんですかね？」

そう思っていた矢先、璃朱の声が突然低くなる。

「誰かの心を癒やす写真を撮りたいって思ってるのに、今はパワースポットに向かうことばかり考えてるんです……写真を撮るには、必要だと思っんですけど、それでも、何か追っている夢と違う気がする……」

「いいと思うよ」

映司は、明るく言う。

璃朱の声が暗くなったのを元に戻そうとするように、いつも通り、そう言う。

「俺も、旅に出ていた時は、きちんと理由があった。これをしていつという願いがあったんだ」

「……」

「でも、俺が初めて旅に出た時、最初から旅をする理由なんてなかったんだ」

映司の発言に、璃朱は驚いた。

世界中を旅してまわることは、思いつきで出来ることではない。どんなちっぽけなものであれ、何かしたいって思うものがあるはずなのだ。

それなのに、映司はその理由がなかったという。

「理由もないのに、旅をしていたんですか……？」

「……というより、世界に興味がなかったんだ」

映司の発言に、ますます意味が判らなくなってくる璃朱は、頭を悩ませていると、映司は言葉を続けていた。

「……ある人に、会いたかったんだ」

- 映司が、まだ5歳の時の話だ。当時の映司の両親は、映司に構う暇などなかったため、日本にいる叔父と叔母の家に預けられていた。

ゴールデンウィークになろうが、盆休みになろうが、年末になろうが、映司に顔すら見せることはなく働いていた。挙げ句の果てには、誕生日にさえ電話も手紙も寄越さなかった。

夜中に目が覚め、叔母が電話をかけているのを何度も見た。いつになっても、両親に甘えることはおろか、顔すら合わせることができずに悲しんでいる映司を、彼女は心配していたのだろう。映司を起こさないように、声を抑えて電話に叫ぶ彼女を何度も見ていた。ほんの少し聞こえた会話の内容から、話し相手は両親であることも、映司は理解していた。

そして、電話をした翌日、叔母はいつもつらそうな顔を隠し、無理やりな笑みを浮かべて、映司と接していた。

そんな彼女の様子を、映司は見えていて辛かった。自分のせいで、叔

父や叔母には迷惑をかけてしまう。

そして、映司は結論を出した。

- - この場所にも、自分はいてはいけない

幼さの割に、妙に冷め切った思考。

そのような結論を出すのに、映司は躊躇わなかった。

それほどにまで、映司は人の暖かさを感じることが出来なくなっていたのである。

そんな日が数週間続き、映司は当時通っていた幼稚園でも、誰とも話さなくなった。最初は普通に遊んでいた友達さえ、今の映司に話しかけることすらなく、幼稚園の先生達が何度話しかけても、聞く耳を持たなかった。

『君は、ここで何をしてるの？』

幼稚園の給食をほとんど食べずに庭へやってきた映司に、一人の男が話し掛けた。

- - 自分の先生と同じくらい、もしくは少し年上の人。  
映司はあくまでも、その程度の印象しか抱かなかった。

『今、給食の時間じゃなかったっけ？早く行かないと、給食みんなに食べられちゃうよ？』

木でできた滑り台の階段に座り込んでいた映司の視線に合わせるように、背をかがんでみせる男。

それを無視する映司は虚ろな目で、給食を食べている同じ組の子供達を見つめる。わいわいと楽しそうに給食を食べる園児達の中には、当然ながら映司の姿はなく、彼を心配している者も見当たらなかった。

『誰かと喧嘩でも、したのかな……？』

無視している映司に構わず、話し掛けてくる男。その問いかけにも無視を決め込もうとする前に男は言い直した。

『……それとも、みんなと一緒にいたくないとか……？』

『……っ！』

自分の本心を見透かされ、映司はその男に対して、初めて反応を見せた。

- - なぜ、そのようなことが判ったのか。

不思議で仕方ないといった表情で、映司は男の顔を見つめる。

『あっちの方を見ながらさ、凄く寂しそうな顔してたから……もしかしてって思ってた』

まるで、映司の心と会話をするように言葉を返す男。

だが、それよりも映司は男の言葉に引っかかっていた。

- 凄く寂しそうな顔をしていた

その発言は - 自分がいるべきでない場所に、他ならない自分が憧れを抱いていることを意味しているに他ならない。

なぜ。

初めて会った男に、そのようなことを言われて、なぜ自分は戸惑っているのか。

- その発言が、凶星だったからだ。

必死に強がって、守っていたことを、ピシャリと言い当てられた映司の体がガタガタと震え出す。

必死に押し留めてきたのに。

悲しくないと思い込んで、孤独だと思いこむことから自分を守ってきたのに。

それを言い当てられたことで、映司は再びそれへの恐怖を抱いたのだ。

『ねえ……』

悲しみに支配されていた映司に、男が話し掛ける。その優しい声は、周りを見れなくなっていた映司の心に響き渡っていく。

『上、見てごらん』

言葉のまま、映司は上を見る。

その先にあつたもの。

それは、視界いっぱい広がる、雲一つない青空だった。

- - その見慣れた光景に、映司は釘付けになっていた。

『どう?』

隣の男が言う。

『なんだか、少し軽くなった気がしない?』

視線を男の方に向けると、その男も笑っていた。

そして、映司は思う。

- - その笑顔は、頭上に広がる青空のようだと。

『空つてさ、俺達みたいに不安になったり、泣いたり、怒ったり、笑ったりするんだ。今みたいな青空は、空は笑っている状態』

『……』

『どっちかが笑顔だとき、もう片方も笑顔になれるよね。そうするとき、人と人がお互いに近づけて、仲良くなって、その人の居場所が出来ると思うんだ』

その時になって、映司は理解する。

目の前にいる男は、自分も笑え、と言っているのだ。

だが、それは自分がいたい場所にいることで苦しんでいる映司には、安すぎる発言だった。

『笑え、ないよ……』

『え……？』

『みんな、僕のことをいつも気遣ってくれてる……そのせいでみんな、笑顔がなくなっちゃったんだ……』

初めて、男に対して口を切いた映司。その声には、嗚咽が所々に滲んでいた。

『それなのに、僕が笑っていいはずないよ……』

『いいと思うよ』

その発言に、映司は顔を上げた。

『みんな、君の笑顔のためにやってくれてるんだからさ、君はそれに、素直に応えてあげたらいいと思う。嬉しかったら笑って、悲しかったら泣いて。たまに言葉にして、相手にどんどん伝えていけばいいと思うんだ』

『……』

『君はもつと素直になっていいんだよ。変に考えたりしないでさ、相手と一緒に笑ったり泣いたりしたらいいんだ』

『……』

『相手のこと、自分勝手に決めつけちゃうだけなんて、哀しすぎるから……』

『……っ！』

映司はその一言で気付く。

自分に気を遣っていた相手が、自分から距離を置いていたのではなかった。

距離をとっていたのは――自分自身だ、と。

「俺が、他の人と関わりを持つようになったのは、それからだったんだ」

今度は映司が、思い出を抱きしめるように話す。

「初めてだったんだ……俺がいたって思った場所で、笑っていいって言うてくれたのは……」

本当に、あの時の男性には感謝している。

他人との関わりに何の価値も見いだせなかった自分が、他人と笑いあったり泣きあったりすることの素晴らしさに出会えることが出来た。

今、映司が可能な限り、関わった人との繋がりを守ろうとしているのは、その男性の教えを尊重しているからである。

「素敵な人だったんですね……」

「うん……でも、その日以来会っていないんだ」

璃朱は、映司の発言に眉をひそめた。

例の男性と出会った翌日、映司は外国にいる親元に引き取られることになっていた。なんでも仕事が一段落ついたらしい、ということを知り、叔父と叔母から聞いていた。叔母からの電話を幾度となく受けていた両親は、年相応の子供らしく育っていなかったことを考慮しつつ、そのような決断に至ったのだろう。

そのような話に、映司は戸惑ったものの、結局はそれを了承した。その時は、自分の居場所などどこにもないと思っていたから、自分がいる場所はどこでもいいと自暴自棄になっていたのが、最大の理由である。

しかし、男性と会った後の映司は違った。自分がいるその場所で、笑っていいことに気付いた彼は、人が変わったかのように素直に生きるようになっていた。年相応の子供らしく、明るく振る舞う彼の近くには、子供大人問わず、多くの人が集まるようになっていった。人との関わりを大切にするようになった彼はやがて青年へと成長し、自分を変えた男性に合うために日本に戻ってきた。

しかし、映司がいた幼稚園で聞いたところ、その男性は今、世界中を冒険している最中のことだった。今どこを旅しているのかも判らず、いつ戻るかも判らない。故に、彼に会える確率は絶望的に低いということらしい。

だが、映司にとって、それは諦めの言葉にはならなかった。

微かに残っている、男性の記憶。

青空を見上げていたあの時、清々しい笑顔になっていた男性は、きっと誰よりも青空が好きに違いない。

そのような思い込みを、胸に抱きながら映司は世界中を旅することを決めた。

あの時言えなかった――今だからこそ言える礼の一言を告げるために。

「……これが、俺が旅に出た切欠」

語り終えた映司を、璃朱は呆氣に取られた様子で見つめていた。

そんなちっばけな理由で、小さすぎる可能性のみで、世界中を旅してきたと言えば、誰だって呆れ果てるだろう。

――しかし、逆を言えば、映司にとって、それほど大きなことだったんだろう。

そう考えると、璃朱は映司に多大な影響を与えた男性との経緯につ

いてを益々知りたくなっていた。

「それで、その人には会えたんですか……？」

「ううん、まだ」

話を戻そうとした璃朱に対して、あっけらかんと言う映司。世界中を旅したとはいえ、手掛かりが壊滅的に少ないのだ。むしろ、それで見つけられるとしたら、この世界中の人間は恐ろしく単純な生き物になってしまうだろう。

「でも……」

呟く。

「俺はその旅を切欠で、世界の大きさを学んだんだ」

映司が旅してきた国々。

高度な技術が街をひしめく国や、商業が発達している国。

自然の作物が豊富にとれる国や、過去の歴史を尊重し、独自の宗教をもった国。

戦争により、明日の生活さえも不安に包まれた国。

その人々と触れることで、映司は色々なことを学んできた。

自分の小ささと世界の大きさ。

ちつぽけな理由で争う人々の心の醜さや、ちつぽけなものでも守ろうとする人々の心の美しさ。

どれもが、映司にとってはかけがえのない思い出だった。

その旅の中で――自分がやるべきことを知った。

「その旅でさ、色んな場所を巡って、紛争が起きている地域がまだまだ沢山あるってことを知ったんだ。それで、そこの人達の為に、何かしてあげたいって初めて思ったんだ」

「じゃあ、その男の人に会うのは……」

「諦めてないよ」

璃朱の疑問に、映司ははつきりと応えた。

「その人と会うためにも、その人が見てきたものを俺も見なきゃいけないって思ったんだ」

誰かが笑顔で接すると、もう一方も笑顔になる。

その発言の意味が分かるようになった今だからこそ、映司は考えられるようになった。

そう言った男性も、誰かと常に笑顔と接してきたのではないかと。

「勿論、そういった人達を笑顔にしたいって思ったんだけど、こう

した活動が続けていれば、いつかその人にも会えるかなって思ってた。そこまで言って、映司は理解の方へと向き直る。

「だから、璃朱ちゃんも自分の行動に疑問を持たなくていいんだ。大切なのは、自分がしたいことを見失わないこと」

「自分がしたいことを、見失わない……」

「そうすれば、自分の夢をちゃんと追えるし、忘れることもない。自分の夢のためだったらさ、臆病にならずに進んでいっていいんだよ」

映司の発言に、璃朱は黙り込む。

その沈黙が映司には少し気まずかった。自分と同じような気持ちを抱いていても、同じ方法で事態を解決できるとは限らない。

あくまで、アドバイスのつもりで言ったことだったが、それが余計に彼女を悩ませているのなら、自分の一言は余計になったのかもしれない。

「あ……あくまでも、参考にして貰えればって話。じゃあ、俺はもう行くから」

気まずさを紛らわせるように、映司はそそくさとその場を立ち去ろうとした。

「あの……」

その瞬間、璃朱が映司を呼び止めた。

「映司さんは、その活動の最中なんですか……？」

「え……？」

何気ない、一言。

「まだ、その男の人に会えてないんだったら、映司さんはまだ活動を続けてるってことかなって思ってた……」

その一言が、映司の時間を停止させた。

そして、映司の脳裏に浮かぶ光景。

爆発する建造物。

大きく舞い上がる炎。

泣き叫ぶ、少女の姿。

大量の資金と引き換えに引き戻される自分。

そんな自分に助けを請うように、悲しみに満ちた多くの瞳。

それらが、映司の中を一気に駆けめぐっていた。

思い出す度に、胸が強く締め付けられる。そのような光景が一瞬で全てを持って行きそうな錯覚を覚え、それに抵抗するように映司は激しく呼吸をして、なんとか落ち着かせる。

「今は、ちよつと休憩中……かな？」

璃朱に心配をかけないように、無理やり笑顔を作つて応える。

しかし、璃朱はその笑顔を見て、気まずそうな顔になった。そしてそれ以上は聞いてはいけないような気がしたのか、彼女も気まずそうな表情になり、黙り込んでしまう。

「じ、じゃあ、俺もう行くから！」

気まずい空気に耐えきれなくなったように、映司は璃朱をその場に  
残し、全力で走り出す。

「あ……映司さん……！」

璃朱は、映司を呼び止めようとする。しかし、彼はもうこちらを振り向こうとはせず、何も考えないように必死に走り続けていた。

――そんな、彼の背中はいままで見たことがないほど悲しそうな背中だった。

なぜ。

あそこまで、彼が態度を変えたのか。

なぜ。

彼はあれほどにまで、悲しそうなのか。

世界を旅するということは、人をあそこまで変えさせるほどの出来事が沢山待っているということなのか。

それほどにまで、多くの人の思いが入り混じり、さらに多くの人の思いに影響を与えるのだろうか。

自分が行く、パワースポットに関しては、それ以上の何かがあると

いうことなのだろうか。

知りたい。

もっと、知りたい。

世界にある、自分の知らないことを、もっと知りたい。

璃朱の中で、急激に思いが膨らんでいく。

自我が吹き飛びそうなほどにまで、大きく。大きく膨らんでいく。

その最中、背後で物音がする。

- - まるで、コインが落ちたような音が。

『その欲望を……』

声に反応し、璃朱は振り返る。

するとそこには、言いようの知らない、右手に銀貨のような物体を持った異形の存在があった。

そして……。

『解放しろ……！』

その一言と同時に、璃朱の額に銀貨のような物体を挿入した。

「ハアツ……ハアツ……！！」

璃朱のもとから全力で走ってきた映司は、公園の入り口でようやく足を止めた。体に押し寄せる疲労により、立っているのもやっとだった映司は、公園の名前が掘られた、高さが胸部あたりまである柱にもたれかかった。

「ハアツ……ハアツ……！！」

酸素を欲する体中に口と鼻から大量に酸素を送り込む。不要となった二酸化炭素をそれらから大量に排出し、また酸素を送り込む。

その行為を何度も何度も繰り返すことで、映司はようやく落ち着きを取り戻した。

落ち着くに従って、映司の脳裏に映像が飛び交っていた映像が、より鮮明に浮き上がってくる。

――自分が救えなかった、少女が声をあげて泣いている姿が。

「いい加減、女々しいよなあ……」

ため息を吐きながら、映司は自虐的な笑顔を浮かべた。

正直、情けないと思う。その光景を思い出すだけで、息が詰まり、身動きが取りにくくなる。

現に、璃朱になんの断りもなしに、彼女の前から走り出してしまったのだ。こんな自分の態度に、少なからず彼女は戸惑いを感じているだろう。

これまでも、そう感じさせてきた人は沢山いただろう。愛想笑いだけで誤魔化してきたものの、よくこれまで続いたな、とも思う。

- 忘れるとは言わないけど、早く乗り越えないと……

呼吸を整えた映司は、心でそう言う。

「一言、璃朱ちゃんに謝っておこうかな……」

そう決めた映司が、走ってきた道を戻ろうとした時だった。

キヤアアアアアアッ！

彼女の、悲鳴が木霊したのは。

璃朱は、目の前の光景を凝視していた。

- ・・なに、これ……？

・・・なにが、どうなってるの……？

その光景に自身の冷静さを持っていかれた彼女の本能が、無意識にそう呟いた。

「璃朱ちゃん!!」

映司の叫び声が、璃朱をなんとか我に返させた。

「映司さん……」

「大丈夫！？怪我はない!？」

未だに何が起こっているのか判らない様子で、彼女は映司の方を見る。彼女の近くには、無惨に引きちぎられた彼女のショルダーバッグが転がっていた。

しかし、彼女はそんなことに気に留めず、ある一点を見つめていた。

「映司さん……わたしの、なか……から……化け物が……」

彼女の発言に驚きつつも、映司は彼女の視線を辿る。

・・・そこにいたのは、人間とかけ離れた異形の存在だった。

形状は人間と酷似しているものの、その肌は黒に近いグレーで、全身の至る所を包帯らしき布が覆っている。人間でいう頭部にあたる箇所には、目を表しているかのような三角の穴が二つあり、フラフラとした足取りは何かを探して彷徨う亡霊を彷彿とさせる。

「ヤミー……！」

ヤミー。

人間の欲望を肥大化させ、その欲望のままに暴走する怪物である。その行動はヤミーによって異なるが、ヤミーが出てきた人間――ヤミーの親の欲望を満たすように行動し、それを繰り返すことで成長を続ける。

また、ヤミーにも種類があり、親とは別々に行動するものや親に寄生した上で親に行動させるもの。または、親の住処、もしくはそれに準ずる場所に卵を植えつけ、親自身が行動することにより複数匹が同時に成長するものなどがいる。

ヤミーは、その体をセルメダルという銀色の硬貨で形成しており、成長するに従ってそのメダルは数を増していく。ちなみに、映司達の前をふらついているヤミーは白ヤミーと呼ばれており、まだ成長途中の存在だ。これを倒しても、セルメダルは一枚しか入手することが出来ないのである。

「お前の方が先にいるとは、ちょっとは使えるようになったなあ……」

ヤミーを見据え、その名前を口にする映司を、いつの間にか木の上 にいたアंकがヤミーと映司を見下ろしていた。

ただし、彼の右手はクスクシエにいた時のものとは違い、緑や黄などの色を一部に施し、鳥類の両翼を模した物体が着いた赤い腕へと

変貌していた。

「自分で勝手に動き回っているのを見ると、あいつはウヴァのヤミ  
ーだな……」

- ヤミーは、欲望を持った人間に、セルメダルを投入することで  
生み出される存在である。- ヤミーは、欲望を持った人間に、セ  
ルメダルを投入することで生み出される存在である。では、そのヤ  
ミーを生み出す存在はなんなのか。

その正体の名は、グリード。

約800年前に姿を現したそれは、人間の欲望を暴走させることに  
加え、その圧倒的な力によって世界を終焉に向かわせる存在……と、  
映司はアंकから聞いている。

アंकが言ったウヴァという名前は、そのグリードのうちの一体で  
あり- 同時に、アंकもまた、グリードの一体である。

グリードは人間の欲望からヤミーを生み出し、増やしたセルメダル  
を糧に自身を保っている存在だが、ヤミーと決定的に違う点が存在  
する。

それは、コアメダルというメダルの存在だ。

ウヴァを含め、グリードはその体を構成するセルメダル以外にもコ  
アメダルといった特殊な力が宿ったメダルを体内に有している。そ  
のコアメダルにも種類があり、ウヴァはクワガタ虫、カマキリ、バ  
ッタの力を宿したメダルを体内に取り込んでおり、他のグリードも  
3体の動物の力を宿したコアメダルを体内に有している。各グリー

ドのコアメダルは全部で各種3枚ずつの計9枚存在しているが、体内に9枚全てを有しているグリードは現在存在しない。

コアメダルが彼らの力の大元となっているため、彼らの体からそれが抜け落ちると力は格段に低下し、自身の存在を維持することが出来なくなる。故に、グリードである彼らは不足している自身のコアメダルを求め、完全な状態に復活し、自身の欲望を達成しようとしている。現にアंकは自身のコアを2枚しか所有していないため、右腕しか再生していない。しかし、『完全な肉体を手に入れる』という欲望を胸に、現在ではヤミー関連の事故により意識を失っている泉 信吾の肉体を乗っ取り、自身のコアメダルを探しているのだ。

「アंक！早くメダル！」

木の上で白ヤミーを冷静に観察していたアंकに、映司が叫ぶ。そんな彼に対し、アंकは苛立った様子で舌打ちを返す。

「やるからには、セルメダルしっかり稼げよ！！」

叫ぶと同時に、タカの刻印が刻まれた赤色のメダル、トラの刻印が刻まれた黄色のメダル、バッタの刻印が刻まれた緑色のメダルを取り出すと、アंकはそれらを映司に向かって放り投げた。

それらを右手でキャッチしながら、映司は空いている左手でちょうどメダルがすっぽり収まるほどの空洞が3つほど空いた、黒色と淡い青色が基調となった物体――オーズドライバーを腹部に当てる。すると、オーズドライバーの両端からベルト状の帯が飛び出し、映司の腹部にそれがしっかりと固定される。

映司は、両手に持ったタカのメダルとバッタのメダルをそれぞれ空

洞の右と左に挿入した後、中央の空洞にトラのメダルを挿入する。ベルトに付属していた機械――オースキャナーを右手に握り、地面と平行だったオースドライバーの右端を叩き上げオースドライバーを斜めにする、右腕と左腕もドライバーと同等に傾け、姿勢を一層鋭くする。

そして、オースドライバーに挿入した3枚のメダルを、映司は右手に持ったオースキャナーで一氣に通過させた。

「変身！」

メダルの色と同じ色の光の輪が、それぞれのメダルを中心に浮かび上がる。

映司の声を切欠に、映司の頭部、胸部、脚部を無数の円状の物体が回転し始める。

『タカ！』

頭部の円状の物体が、タカのメダルの刻印を。

『トラ！』

胸部のそれが、トラのメダルの刻印を。

『バッタ！』

脚部のそれが、バッタのメダルの刻印を、映し出す。

『タ・ト・バ！タトバタ・ト・バ！』

奇妙な歌声と共に、3つの刻印が1つの円盤に収束され、それが映司の胸部へと飛び込んだ。

すると、映司の体が全く別の姿へと変化していた。

黒を基調としたボディの頭部、腕部、脚部の彩色がそれぞれ異なっていた。

頭部は、赤い鳥を模し、人間でいう目の部分には緑色の複眼が装飾された仮面。

腕部は、胸部の円盤 - オレンジサークルのトラの刻印から出た黄色いラインが肘あたりまで延び、肘から先は虎の腕を彷彿とさせる黄色い腕。

脚部は、オレンジサークルから出た緑色のラインが延び、膝上からはバッタの脚を彷彿とさせるデザインが施された緑色の脚。

オーズ。

800年前、グリードを封印した存在。グリードの力の源であるコアメダルを用い、メダルから引き出せる能力を駆使するその存在は、神に等しい存在とされてきた。

グリードとの闘いの後、オーズの力共々封印されてきたらしいが、

アंकから詳しく聞かされていないため、映司はグリードとオーズは天敵通しという程度にしか解釈していない。

今、映司が変身したオーズの姿は基本形態であるタトバコンボと言われる形態だ。様々な能力を使い分けるオーズだが、それは相手の戦法をみた上で実行される。このタトバコンボは機動力に優れ、なおかつ映司の身体にも強い負荷を与えないため、彼が変身する上で最もよく使用される形態だ。

「はあっ！」

オーズは腕に意識を集中させる。すると、オーラングサークルから延びた黄色いラインが光り、その光が腕の先へと走っていく。光が腕の先に到達すると、腕に折り畳められていた爪・トラクロウが展開される。

次に、脚へと意識を集中させると脚に延びた緑色のラインが光り、オーズはそのまま白ヤミーの方へと大きく跳躍する。

「セイヤッ！」

跳躍した勢いのまま、ふらつくヤミーの背中を蹴り上げた。オーズの奇襲にヤミーはバランスを崩しかけるが、なんとか踏みとどまると、自分に危害を加えたオーズに反撃しようとして距離を詰めてくる。

『ウウウ……ヴァアアア……！』

フラフラと近寄りながら、縦横無尽に腕を降り続けるヤミーの攻撃をオーズはかわす。そのお返しと言わんばかりに、ヤミーにトラク

ローを使つて3回ほど攻撃すると、ヤミーは後退り、なんとか姿勢を立て直していた。

『知りたい……もっと……知りたい……』

ヤミーの発言を聞き、オーズは足を止めた。

そうこうしていると、ヤミーは足下にあつた木の枝を拾い上げ、それを眺める。

そして――

『ングッ……』

その木の枝を体内へと取り込んだ。

『知りたい……もっと……たくさんのことが……世界中の色んなことが……』

大きな独り言を言い続ける白ヤミーを、オーズとアंकは黙視する。そうしている間も、白ヤミーは地面に転がっている小石や風に飛ばされたポスター、挙げ句の果てには誰かが落とした携帯電話を次々と取り込んでいった。

「知識欲か……典型的な欲望だなあ……」

「知識欲……？」

白ヤミーの欲望の源を把握したアंकの声に、オーズは首を傾げる。

「けど、あれって色んなものをただ取り込んでるだけじゃないか？」

「人間の赤ん坊を考えてみる。食い物や危険な物、なんでもかんでも口に入れ、それでそれがどういうものなのかがやつと判る……言ってみれば、あのヤミーは生まれたての赤ん坊のように色々取り込むことで、それが何なのかを知ろうとしているだろう」

アंकの説明に、オーズは納得をした様子を見せるが、同時に人間ではないアंकに指摘されたことに少しショックを受けていた。

そんな、オーズに目もくれず、アंकは、白ヤミーを黙視していた。

（しかし、あのヤミー……なかなか成長しないなあ……そこそこメダルは貯まっているはずだが……）

アंकはグリードの能力のひとつで、これまでヤミーの活動を正確に感じ取っていた。それは、ヤミーの中にセルメダルがある程度蓄積し、ヤミーが成長する際の合図でもある。

しかし、アंकはそれを感じたにも関わらず、白ヤミーは未だに成長する兆しを見せない。そこらにあるものを手当たり次第に体内に取り込んではいるが、そのどれもが知識欲を充たす存在ではない、ということなのだろうか。

（これじゃあ、何のために映司にメダルを渡したのか……）

アंकはセルメダルを回収するために、オーズの力の源であるコアメダルを渡している。だが、それはヤミーの中にある程度、メダルが蓄積してからの話だ。一体のヤミーから、大量のセルメダルを回収するというのが彼の基本的な考えだ。

だが、今のアंकは、すぐにでもヤミーを倒させ、セルメダルを回収しようとしている。

何故か。

- セルメダルを、横取りさせないためだ。

「おー、おー。やってるねえ！」

ヤミーと戦闘するオーズと、それを傍観するアंकとは別の方向から、男の声が聞こえた。

切りそろえられた短髪に、口元と顎に生えた髭。服装は茶色のダウンジャケットに深緑色のブカブカのズボン、黒色のブーツ。自身の胴体ほどの大きさのミルク缶を軽く担いだ、見るからに豪快そうな男性だ。

「ちつ……来やがった……！」

「伊達<sup>だて</sup>さん！」

心底鬱陶しそうにアंकが呟き、オーズは男の名前を叫ぶ。

伊達<sup>だて</sup>明<sup>あき</sup>。

最近、映司達の前に現れた、鴻上ファウンデーションの臨時社員である。

「俺も、混ぜてもらいますか」

そう言うと、伊達はあるものを取り出す――碧色の球状の物体が固定されたバックルの横手に回し手がついた物体がとりつけられた、ベルトだ。

右手にその一端を握った伊達は、自分の体を中心に、そのもう一端を時計周りの方向に放り投げる。生じた遠心力により、ベルトが伊達の体に巻き付き、放り投げられた一端がバックルに到達し、固定される。

伊達はさらに、右拳に乗せたセルメダルを親指で真上に弾き、それを左手で掴み取っていた。

「変身」

掴んだセルメダルを碧色の球状の物体の左側にある空洞に挿入すると、それが鮮やかに輝き出す。次に伊達は、回し手を2回ほど回すと、『カポーン』という音が空間を振動させた。

その直後、伊達の周囲を碧色の光が包み込み、同色、もしくは酷似した色の金属が、制御プログラムのような電子的な動きで伊達の体に纏わりついていく。

碧色の光が収まった後、伊達がいた場所には、全く異なった存在が佇んでいた。

シルバーのプロテクターに、バックルの球状の物体が着いたものを両肩、両腕、両脚、腰の左右、そして胸部に着いており、全身は黒を基調としたスーツ。プロテクター以外の胸部は碧色の鎧で覆われており、顔面の大部分がU字の複眼で覆われている。

仮面ライダーバース。

鴻上ファウンデーションが開発した、セルメダルを活用してヤミーに対抗するための肉体強化ユニットである。

「んじゃあ、稼がせてもらいますか！」

叫ぶと同時に、バースは大型銃・バースバスターを構える。照準をフラついているヤミーに合わせると、バースは思い切り引き金を弾いた。バースバスターの銃口からはセルメダルが発射され、命中したヤミーの体からは火花が飛び散っていた。

「火野！アンコ！悪いけど、またメダルはこっちが全部いただくから！」

ヤミーが倒れた際に、オーズとアंकに近づいてきたバースはそのように告げる。するとアंकは精一杯の嫌みを込め、「ハッ」とバースを鼻で笑い飛ばす。

「残念だがなあ、そのヤミーを倒しても、メダルは一枚しか手に入らないぞ」

「え！？そうなの！？」

アंकの発言に、そのことを全く知らなかったバースは驚いた様子のリアクションを見せる。「そんなこと、マニュアルに書いてあったっけか……？」と、まともに読んだこともない、バースやヤミーについて纏められたマニュアルに文句を言い出す光景はなんともシユールだ。

「良かったなあ。ひとつお勉強になって」

これぞとばかりに、最大限の嫌みをバースに向かって言い放つアンク。それに対し、オーズはアंकをなんとか宥めようとするが、言われた当のバースは「ま、いいや」とあっさり流す。

「一枚だろうがなんだろうが、俺が全部もらうよ。きっちり、これだけ稼がないといけないからね」

そう言うバースは、ピツと人差し指を天に向かって指す。

それが意味するもの。

一億という、金額。

伊達は、その目標のために、戦いに臨んでいるのだ。

「じゃ、そういうことで」

「あ、ちょっと……」

一方的に話を終わらせ、フラフラと立ち上がろうとしているヤミーに向かうバースに、オーズは話しかけようとしたが、バースはそのまま行ってしまう。

――だが、その行き先を複数の物体が防いでいた。

「おわっ！？なんだ、こいつらは！？」

バースの行き先には、先程までオーズとバースの標的だったヤミーと酷似した物体がウヨウヨと歩いていた。例のヤミーとの相違点は、身を覆う包帯は少なく、汚れており、顔の部分には黒い穴がポツカリと空いていた。

そのヤミーが十数体という群れを成して、バースの周りを取り囲んでいた。

「屑ヤミー……！」

その存在を確認したアंकが、またも憎々しい様子で、その名を口にした。

屑ヤミー。ヤミーでありながら、ヤミーでない存在。

通常のヤミーとは異なり、こちらは親となる人間を必要とせず、複数体一気に生成することが出来る利便性があるが、通常のヤミーのように欲望を果たすような行為は一切起こさず、また成長もしないので、体内にはセルメダルを一切蓄積しない。通常のヤミーがセルメダルを稼ぐ戦闘員であれば、屑ヤミーは足止め専門のヤミーと言った方がピッタリと当てはまるであろう。

「うわ、こっちまで……！」

いつの間にか、オーズの周りにも大量の屑ヤミーが押し寄せてきていた。オーズ、バースは屑ヤミーの対応に追われ、白ヤミーはその間に取り込もうとする物を探し始めていた。

「ちっ……映司！」

「え!？」

「こいつで、屑ヤミーを追っ払え！」

アंकは取り出したメダルを、オーズに投げ渡し、オーズはそれをキャッチする。オーズの手の中には、クワガタの紋章が刻まれた緑色のメダルがあった。

オーズは無言を言わず、オーズドライバーのタカのメダルを外し、タカのメダルを納めていた場所にクワガタのメダルを納め、再び三つのメダルを、オースキャナーで読みとらせた。

『クワガタ、トラ、バッタ!!』

体の各部分の周辺を回っていた無数のメダルが、それぞれの紋章を映し出すと、それらは再びオーラングサークルに収束され、オーズの胸部に飛び込む。

すると、タカの形状を模した赤色の覆面が、クワガタの形状を模し、橙色の複眼を有した緑色の仮面へと形を変えた。

「うおおお!!」

オーズが叫ぶと、クワガタの覆面の角の部分から、緑色の稲妻が周

囲に拡散する。それを浴びた屑ヤミーの数体は粉碎され、屑ヤミーがいた場所には、砕かれたセルメダルの一部が転がっていた。

「セイヤア！」

オーズは次に腕に意識を集中させると、既に開いていたトラクローが輝き出す。それを残りの屑ヤミーに食らわせることで、オーズの周囲の屑ヤミーは一匹残らず崩れ落ちていた。

だが……。

『フンッ！』

「グアッ！」

次の瞬間、オーズは背後から、鋭い爪のようなものの一撃を食らっていた。深くまではいたらなかったものの、思いがけない一撃により、オーズは膝をついた状態で、背後を振り返る。

『オーズ、アंक……これ以上の邪魔はさせん……』

そこにいたのは、クワガタの角のような角を頭部から生やし、両腕に生えたカマキリの鎌を彷彿とさせるかぎ爪やカマキリのような複眼、昆虫の外骨格や節足的な突起に覆われたような体格を有した緑色の化け物だった。

「ウヴァ……今度のヤミーはよっぽどノロマだなあ……お前もとうとう欲望を見れないほど、バカになったか」

『フン……勝手にぼざいてろ』

アंकと言い合いながらも、ウヴァは鉤爪でオーズを切り裂く。

「うあつ!？」

切り裂かれた場所から火花が飛び散りる。オーズはなんとか距離をとろうとするが、機動性と俊敏性に長けたウヴァは一瞬で距離を詰め、鉤爪によるダメージをオーズに確実に蓄積させていく。

その様子を見ながら、アंकは舌を打つ。いくら映司がオーズとしての戦闘に慣れてきたとはいえ、相手がグリードとなると勝手が異なってくる。メダルを有しているなら対抗できるかもしれないが、今手元にあるメダルを渡してもウヴァに邪魔されるのは目に見えている。

どうしたものか……アंकが頭を悩ませていた時だった。

『C r a n e   A r m』

遠くのほうから電子的な音声が聞こえたかと思うと、オーズとウヴァの間を巨大な鉄の塊が通り過ぎる。お互いに間逆の方向に飛び、それをかわした後、オーズはうつ伏せの状態から、鉄の塊が飛んできた方向を見る。

「火野！危ないから、ちょっと引っ込んでろ！」

声を上げたのはバースだった。ただし、その右腕には先程通り過ぎていった鉄の塊と、それを支える柱のような巨大な物体がバースの

腕に装着されていた。

クレーンアーム。バースが使用する専用武器の一つだ。

バースは用途に応じて、様々な武器を使い分けることができる。このクレーンアームを使用することで、周囲にいた屑ヤミーを一気に蹴散らし、それと同時にこちら側へ攻撃の手を伸ばしたのだ。細々とした戦い方を好まない、実に彼らしい戦い方だ。

「今回は、あんたで稼がせてもらおうか！」

叫びながら、バースはバースドライバーの横にある空洞に、セルメダルを投下する。

『C a t e r p i l l a r l e g g』

再び鳴る電子音と同時に、バースの足がまるでブルドーザーの車輪を模したかのような装軌車両へと変化する。変化が終わると同時に、その車両が回転をはじめ、バースはクレーンアームをウヴァに放ちながら、ウヴァへと接近を始める。

「おらあー!!」

『グッ……!!』

「うわ！ちよ、ちょっと伊達さん！危ないって！」

バースのクレーンアームの一撃を、ウヴァは何とかかわしていくが、その攻撃はオーズさえも巻き込まんとする勢いであった。この流れに乗ってウヴァを倒そうとする余裕があるわけもなく、オーズも

必死に回避行動を取っていた。

「だから、言ってるだろ。危ないからどいてろって!!」

オーズの発言をまるで耳にしないで、攻撃を続けるバース。

この隙に乗じて、アンクはオーズにメダルを与えようと手持ちを確認する。一方、オーズも同じことを考えていたようで、アイキャッチでメダルが渡されるタイミングを見計らう。

『グウツ……!!』

「映司!」

そして、ウヴァとクレインアームが、オーズとアンクの両者から離れた瞬間、アンクはオーズに向かってメダルを投げ渡す。

受け取ったメダルは、チーターの紋章が刻まれた、黄色のメダル。オーズはそれをバツタメダルと入れ替え、すかさずオースキャナーでメダルをスキャンする。

『クワガタ!トラ!チーター!』

オーラングサークルのバツタの紋章がチーターの紋章へと変わり、バツタを彷彿とさせた足もチーターを彷彿とさせるそれへと変化する。

「ハッ!」

掛け声を発するや否や、オーズはウヴァへと駆け出す。そのスピー

ドは先ほどの比ではなく、常人が捕らえるのが困難なほどの走行だった。

「セイヤー！」

加えられた勢いによる強い一撃が、ウヴァを襲う。

『グアツ！！』

あまりにも早すぎる攻撃にウヴァは防御をとれず、まともに直撃を受けてしまい、その傷口からはセルメダルが溢れ出す。その勢いに便乗したバースのクレーンアームがウヴァを襲い、さらに多くのセルメダルが零れ落ちる。

「おお、大量大量」

「映司！メダルを取られんなつたろ！！」

「無茶言つなよ！」

戦闘中であるにも関わらず、談笑を始めるオーズ一同。その対応に、ウヴァはとうとう我慢の限界を超えた。

『貴様らあ……調子に乗るなあ！！』

本気で怒ったウヴァが角から緑色の凄まじい電撃を放出する。それを回避することが出来なかったオーズとバースは地面に倒れるが、傷は思ったより深くはなく、二人とも再び起き上がろうとする。

「む……虫なくせに強いじゃないの……」

妙な持論を語りながらも、バースは再びクレーンアームをウヴァに向けた。それに敵対するウヴァも頭の角からバチバチと稲妻の奔流を垣間見せており、今にもそれらが解き放たれそうな雰囲気となる。

しかし――

「きゃっ!?!」

聞き慣れた声が、オーズの背後から聞こえた。

「え!?!」

とつさに背後を振り返るオーズ。するといつからそこにいたのか、璃朱が木の影からこちらを覗いていたのだ。

「くられ、虫頭!?!」

『ウオオオ!?!』

オーズが璃朱に気をとられた瞬間、バースがクレーンアームを、ウヴァが電撃を放つ。二つはお互いを弾き合い、双方の対象に到達することはなかった。

だが、クレーンアームは電撃の衝撃により、璃朱の方向へと向っていたのだ。

「きゃああああああ！？」

「璃朱ちゃん！！」

チーターレグで出し切れる限界のスピードで、オーズは璃朱のもとへと向う。そのかいあって、クレインアームが璃朱へと衝突する前になんとかオーズはたどり着いたが、それをかわすための時間がオーズにはなかった。

「ぐああああ！？」

璃朱を軽く突き飛ばしたその瞬間、オーズにクレインアームが直撃し、オーズは大きく吹き飛ばされる。その大きすぎる威力は、オーズが飛ばされた先にいたアंकまでを巻き添えにしてしまうほどだった。

「グアッ！」

「あぐっ！」

余程の一撃だったのか、オーズドライバーから、全てのメダルが抜け落ちてしまい、オーズは映司の姿へと戻ってしまう。アंकも咄嗟にメダルを自身の中に取り込んだものの、何枚かのコアメダルを吐き出してしまう。

それに真っ先に反応したのは、ウヴァだった。なにしろ映司とアंकの手元にあるコアメダルを手に入れば、自分をはれて完全復活ができるのだ。これ以上のチャンスはないといっても過言ではないだろう。

そのことを、映司もまた理解していた。自分が倒さなければいけない相手がより大きな力を手に入れてしまえば、苦しんでいる人が益々増えてしまうのだ。

- 完全復活だけは避けなければ。

言うことのきかない体に鞭を打ちながら、散らばったメダルをなんとか回収していく。

トラのコアメダル。

チーターのコアメダル。

そして、クワガタとバッタのメダルに手を伸ばそうとする。

しかし、映司の手にそれが届くことはなかった。  
何者かが、そのメダルを拾ったからである。

それは、伊達が変身したバースでもない。

ましてや、ウヴァでもない。

それは、璃朱から生まれた白ヤミーだった。

「……………っ!!」

予想外の敵に、映司は一瞬言葉を失くす。それは、バースやウヴァも同じである――なんせ、今まで、ヤミーがコアメダルを自分の意志で持ったことなどなかったのだから。

そうこうしている間にも、白ヤミーはアंकから放出されたメダル向って歩いていく。アंकは何とか、自身を信吾の体から分離させ、いくつかコアメダルを回収するも、白ヤミーに一枚奪われてしまっていた。

そして、白ヤミーの手元には三枚のコアメダルが揃っていた――クワガタ、カマキリ、バッタの三枚のメダルが。

『知りたい……もっと、知りたい……』

輝くコアメダルを眺めながら、つぶやく白ヤミー。

そして数秒間、それを眺めていたかと思うと・・・白ヤミーはその三枚を体内に取り込んだのだ。

「……っ!!」

突然の出来事に、映司だけでなく、アंक、ウヴァ、バースも息を呑んでしまう。

その直後、ヤミーに変化が現れた。体中から緑色の光の奔流が溢れ、体の形状が変わっていく。

頭部は白色に、胴色の4本の角が生え。

腕からは、およそ60cm前後の丸みを帯びた切り裂きやすい鎌が。

足は俊敏性と力に満ち溢れた隆々とした筋肉がついていた。

その姿を、映司、アंक、ウヴァはそのヤミーに良く似た概形を見たことがある・・・なぜならば、それはオーズが変身するガタキリバコンボの概形にそっくりだったのだ。

『知りたい……もっと……世界中のことが……もっと知りたい……!!』

満ち溢れた力を、しかしそれに満足しようとなしないヤミー・・・ガタキリバヤミーは、全身から緑色の莫大な雷を周囲に浴びせ、その大きすぎる産声をあげていた。



『ウオオオオオオ!!』

ガタキリバヤミーが絶叫する中、映司とアंक、バーズはその存在を凝視していた。

その、存在感。

威圧感。

なにもかもが、過去に映司達が戦ってきたヤミーとは段違いのものだった。

「アंक、ヤミーってコアメダルまで欲望の対象にするのか!？」

「知るか!……こんな馬鹿げたこと、今までになかった……!」

なんとか態勢を立て直す映司は、アंकに向かって質問を投げかける。だが、アंकから返ってきた答えから察するに、このような経緯を、アंक自身も知らなかったらしい。その取り乱し方は、普段冷静な彼からは想像もつかない程のものだった。

『……ふ。こいつはとんだ拾いものだったな』

ヤミーを生み出したウヴァも想定外……といった様子だが、彼にとつては嬉しい誤算だったようだ。なにせ、蓄積したセルメダルを回収する予定が、自分から欠けていたコアメダル全てが手元に戻ってきたのだから。

『こうなつては、もうこのヤミーに用は無い。さつさと完全体になるとするか……』

そう呟くと、ウヴァは叫んでいるガタキリバヤミーに向かって近づいていく。

「……っ！」

「ちっ……！こいつはマズいな……」

それを遠くから見ていた映司とアंकは大きな焦燥感に駆られた。完全体となったウヴァの戦力が未知数なうえに、手元にあるコアメダルでは、それに対抗できる可能性はほぼゼロに近い。

――それだけは、止めなければ……！

映司とアंकの意志が一致する。映司は体に鞭を打ち、アंकは映司に渡すメダルをメダルホルダーから抜き取る。

だが、そうこうしている内に、ウヴァがガタキリバヤミーに接近する。一瞬、もう駄目か、と映司とアंकは思っても、それでもメダルを受け渡そうとしていた。

そして接近を終えたウヴァが、ガタキリバヤミーの体に触れた瞬間……

『グッ………！』

ガタキリバヤミーが腕から生えた巨大な鎌で、ウヴァを切り裂いていた。あまりにも予想外な出来事に、ウヴァだけでなく映司とアンクも目を見開いた。

『知りたい……もつと……世界中の色々なことが……』

『こいつ……!!』

何度も鎌を振るい続けるガタキリバヤミーの攻撃をかわしながら、ウヴァは苛立ちを募らせる。あと少しのところで完全復活できたのに、それが自分の生み出したヤミーに攻撃をされては、もともと短気で感情的なウヴァにとっては相当なものだろう。

『俺のヤミーのくせに、俺に逆らう気が!!』

一撃の隙をみて、ウヴァはガタキリバヤミーの攻撃を回避し、後方へと飛び上がる。その空中でウヴァは触角から緑色の電撃を発生させ、それはガタキリバヤミー目掛けて飛来する。その大きさは、彼が苛立っていることもあいまって、相当大きなものとなっていた。

『知りたい……もつと……!!』

ところが、ガタキリバヤミーはその電撃に対して、僅かな電撃しか放たなかった。それがウヴァが放った電撃に衝突するが、ウヴァの電撃にかき消されてしまう。

- - だが、残ったウヴァの電撃はガタキリバヤミーに直撃せず、ガタキリバヤミーの周囲の地面に降り注いでいた。

『なにっ……！？』

ガタキリバヤミーに電撃が命中しなかったことを見て、ウヴァは驚愕する。だが、ガタキリバヤミーはそれだけでは終わらなかった。

『ウオオオ……オオオオオ……！！』

砂塵の中でガタキリバヤミーが低い唸り声を上げる。その声は徐々に高さを上げ、宙に待っていた砂が空気の変化に従い、大きく渦巻き始めていた。

その砂塵の中を凝視するウヴァ、映司、アंक、バース。だが次の瞬間には、宙を舞っていた砂塵が周囲に拡散し始める。

その中から現れたのは……ガタキリバヤミーの頭部から発生した電撃が固まった、巨大な球体だった。地上から数メートル浮かぶその球体の大きさはガタキリバヤミー自身の体躯を遥かに越すほどであり、地面から生えた雑草が燃え上がるほど、高密度な固まりとなっていた。

それを見た総員は、背筋に寒気を覚える。あんなものをまともに食らえば、ひとたまりもないのは勿論、むしろ生きていられるかどうかさえも危ういだろう。

そんな中、ガタキリバヤミーが動き出す。その電撃の球体を浴びせるべく、標的――ウヴァの方へと向き直る。

『させるか……！』

それを見た瞬間、ウヴァはガタキリバヤミーへと走り出す。最も命中精度が高い距離から放たれる前に、少しでもその距離を離れ、な

おかつガタキリバヤミーに一撃を浴びせるために、だ。

『ウオオオ!!』

『ヴアアアアア!!』

そのウヴァに対し、ガタキリバヤミーは電撃の球をウヴァに向かって投射する。

だが、直線的な移動しかできない球を喰らうほど、ウヴァもバカげてはいない。自身の脚力で右側に跳び、回避すると、ウヴァが直前までいた地面に大きなクレーターが出来る。しかも、その周辺の大地も広範囲で焼け焦げていた。まるで非常に小さな水爆がこの公園に投下されたかのような現象を目の当たりにした総員は、全身が硬直してしまう。

『ウオオオ!!』

その中で、ウヴァは唯一動き回り、ガタキリバヤミーへの接近を続ける。より直線的に、より速度を上昇させながら、ガタキリバヤミーへと接近し、右腕から生えた鎌で斬りつけようとした。

- まさに、その瞬間だった。

『ガ……グアアアアア……!!』

ウヴァの体が、炎を上げて燃え始めたのである。

その光景に、映司にアंक、バースはただ驚くばかりだった。

燃えるウヴァはなんとか炎を消そうと懸命に体をこすりつけるが、炎は消えることなく燃え続ける。

- 人体自然発火現象。

人間の体が突如として燃え上がる現象。

この現象には様々な仮説が立てられているが、その中のひとつでプラズマが人体に偶然移ったことにより、発生するという仮説がある。ガタキリバヤミーが先程発生させた電撃の球体が放電したことにより、生成されたプラズマがウヴァの体に移ったことが、発火の決め手となったのであろう。

「オ……オオオオオ……！！」

体中の表面を大量のセルメダルに戻し、なんとか炎を沈下させるウヴァ。だが、それでも受けたダメージは大きかったのか、息を荒げながらも、なんとかその場から逃げ出そうとしていた。

「ハッ、自分が作ったヤミーにボロボロにされるとは、ザマアないな、ウヴァ」

散々に嫌みを言い放つアंकだが、その表情には余裕などなかった。先程のような芸当を、いとも簡単に行うことが出来るヤミーは、下手をすればウヴァ自身より質が悪い相手だ。グリードにすら手を焼いている状態なのに、これ以上厄介な存在が増えるとなると、ただでさえバースという邪魔者の登場に苛立っているアंकにとって、さらに不愉快としか言つことが出来ない。

「……今回はかりは、稼きを優先している場合じゃないな！」

これ以上、ヤミーを放置しておく危険であると判断したバースは、ガタキリバヤミーにクレーンアームの一撃を中距離からぶつけようとする。

『ヴアアア……!!』

だが、その一撃も触角からの電撃により簡単に弾かれる結果となる。そのやり取りを見て、「中距離じゃ、埒があかないな」とバースは、近距離用の武器を装着するために、新たなセルメダルを投入しようとする。

だが、十数メートルあった距離を、ガタキリバヤミーが一瞬で詰め寄っていた。まだ態勢を整えていないバースに向かって拳をぶつけようとする。バースはバックステップでなんとかかわすものの、その直後にガタキリバヤミーが脚のバネをフルに使った跳び蹴りが炸裂し、バースは後方へ吹っ飛ばされてしまった。

「あの脚力……バツタのメダルの影響か……。ウヴアの奴、どこまでも余計なことしかないな……」

「アंक、今のうちにメダル!!早く伊達さんを助けないと!!」

ヤミーの動きを観察するアंकに向かい、映司が叫ぶ。映司に与えるメダルを考えるアंकだが、機動力の大きいバツタのメダルが奪われたうえ、その能力を使用する相手に、有効な組み合わせのメダルが思い浮かばない。

「ぐはっ……！」

そっこうしている間に、ガタキリバヤミーによってバースは公園内に植えられた樹木に叩きつけられてしまう。

「虫が集合すると、やったら強くなるわけね……覚えておかねーとな……」

余裕な口調で話すバースだが、その言葉の所々が掠れており、立ち上がろうとする足はガタガタと震えていた。バースに変身することで増長された体力も限界が近いのだろう、彼は自分を立ち上げらせようとするので精一杯だった。

そんなバースを、ガタキリバヤミーは右腕の大鎌で容赦なく切り裂いていた。

『ガアアっ………！』

切り裂かれた場所から大量の火花が飛び散り、倒れ込んだきたバースの腹部を、ヤミーはさらに殴りつけ、バースを大きく吹き飛ばしていた。

「ガハッ………！」

「伊達さん！！アंक、何でもいいから、早くメダル！！」

「うるせえ……！」

地面に叩きつけられたバースに向かって、叫ぶ映司。早く助けなけ

れば、と思い、アंकを急かすものの、アंकは映司を怒鳴り散らす。

「あんな奴と戦えるメダルがあれば、とつくに渡してる……！」

憎々しげに言いながら、アंकはバースに迫り来るガタキリバヤミ―を睨みつける。

メダルにいくらかの種類があるとは言え、ガタキリバヤミ―に有効な組み合わせのメダルは存在していない。仮に適当なメダルを渡したとしても、返り討ちにされるのは目に見えているし、途中で交換させてもその隙にやられ兼ねない。

今、対峙しているガタキリバヤミ―は、それ程の力を持った相手なのである――認めざるを得ない現状に、アंकは盛大な舌打ちをしていた。

「じゃあねえ……火野、アンコ！！危ないから近づくんじゃねえぞ！！」

何とか立ち上がったバースは映司とアंकに叫びながら、セルメダルをバースドライバーに挿入する。

『B r e a s t   C a n o n 』

バースドライバーから機械的な音声がり響き、バースの胸部に、両側に大きな握み手がついた砲身部が赤い大砲――ブレストキャノンが生み出される。

その後に、バースはセルメダルを2枚、バースドライバーに挿入し、

ハンドルを回す。

『Cell Burst』

大砲が甲高い音を放ちながら、砲身部から緑色の光が溢れ出す。だが、バースはさらにメダルをバースドライバーに挿入し続ける。

『Cell Burst』

『Cell Burst』

幾度も同じ行為を繰り返す度に、ブレストキャノンから発せられる音は大きく、高く。

そして、砲身部の緑色の光はとてつもなく大きくなっていく。

「こいつで……最後だあ!!」

手元にあったセルメダルを全て投入し終え、さらにハンドルを回す。

『Cell Burst』

その瞬間、機械音の音量も、砲身から溢れる光も最大となる。それを見届けたバースは、ブレストキャノンにある掴み手を、それぞれ両手でガツシリと握り締め、砲身をガタキリバヤミーへと向ける。

だが――

「マジかよ……!!」

呆気にとられた様子で、呟くバース。

バースの目の先にあつたもの……それは、ガタキリバヤミーが例の電撃の球体を生成し終えた光景だった。

「あんなものを、また作るとは……どこまでも厄介な奴だ……」

高密度な電撃の球体をまたもや瞬時に作り出す芸当を見て、アंकはそう呟く。

「伊達さん、早くよけて!!」

今にも球体を手放そうとしているガタキリバヤミーを横目に、映司はバースに懸命に叫ぶ。

「心配御無用!! あれを食らう前に……」

ガタキリバヤミーが、バースに向かって電撃球を放ち。

「撃つ!!」

バースが、ガタキリバヤミーに向かい、ブレストキャノンを撃ち放つ。砲身に充満していたエネルギーが一気に放出され、真っ直ぐ電撃球に延びていく。

そして、双方は衝突した。ぶつかり合ったそれらは、一步も退かずに前へと進もうとする。拮抗して生じた衝撃波が周囲に拡散し、映司とアंकは手でそれを両手で防ぎながら、その戦いを見守っていた。

「ウオオオオオオオオオオ！！」

腹の底から、限界に近づいた体力を全てつぎ込み、叫ぶバース。その叫びがブレストキャノンから放出される砲弾により強い力を与える。

そして、数秒に渡る拮抗が崩れ去る――勝利したのは、ブレストキャノンだった。

「ラアアアアアアア！！」

電撃球を弾き飛ばしたブレストキャノンは、そのままガタキリバヤミーに一撃を喰らわせた。かなり威力が削り取られてもなお、高い威力を持ったそれはガタキリバヤミーに確かなダメージを与えていた。

だが、そんなことにバースは――否、映司もくれなかった。

弾き飛ばされ、その規模が格段に小さくなった電撃球が、あろうことか、璃朱の方へと向かっていたのである。

「しまった……！！」

慌て、璃朱を助けに向かおうとするバースだったが、これまでのダメージが邪魔をし、体が言うことをきかないために、動くことすら出来なかった。

「璃朱ちゃん、早く逃げて!!」

「……っ!!」

注意を促す映司に、しかし璃朱は顔を歪ませるだけだった。先程の電撃球の被害を間近で目の当たりにして、完全に体が竦んでしまっているのだ。

懸命に体を動かそうとするも、力の入らない体は、石のように固まっていた。次第に迫り来る恐怖が焦りを生み、さらに大きな恐怖を煽る。

迫り来る電撃球の前に、自分の未来が想像できたのか、璃朱は全てを諦めたかのように、目を閉じていた。

…その暗闇の中で、二つの叫び声が聞こえた。

「おい、映司!!」

「よせ、火野!!」

叫び声に反応し、璃朱は再び目を開ける。

そこにあっただのは、こちら側に全力で走ってくる映司だった。

「うおおおお!!」

先程のダメージのせいでふらつきながらも、懸命に走る映司。だが、

その速度は、それを感じさせないほどのものだった。

「ハッ!!」

そして、その勢いのまま、残った力を右足に込める。

電撃球が間近に迫っていることに臆することもなく。

速度を全く落とすこともなく。

映司は璃朱に向かって、その腕を目一杯伸ばしながら、飛び込んでいた。

- -そして、その腕が璃朱を突き飛ばした瞬間、電撃球が映司の影を飲み込み、爆発した。

「映司!!」

「火野!!」

爆発により飛び散る砂煙に向かい、アंकとバースは叫ぶ。

電撃球が小さくなっていたとはいえ、地面にできた大きなクレーターと大きな爆発は二人に、映司の死を想像させた。

時間の経過と共に、砂煙が少しずつ晴れていく。

その先には……

「グッ……」

――力無く倒れている映司がいた。彼の様子を見る限り、直撃は避けられたようだが、爆発の余波を避けることは出来なかったようだった。

「映司さん……！！」

「璃朱ちゃん……怪我はない？どこか痛い所とかない？」

「それより、映司さんの方が……！！」

なんとか立ち上がった映司は自分よりも、璃朱の方を心配し始める。璃朱の方に怪我はなかったが、彼女は明らかに自分よりも傷を負っている映司のことを心配していた。

「ああ、俺なら大丈夫大丈夫。それより、本当に大丈夫だった？」

苦笑いを浮かべながら、あくまでも璃朱の心配をする映司。そんな映司の強引さに、璃朱はつられて頷くことしか出来なかった。

「そっか……良かった……」

「何が、良かっただ……こっちはメダル3枚も取られるわ、訳の分からんヤミーが生まれるわ、セルメダルは一枚も手に入らない……さんっざんだ！」

映司が心底安心している横から、いつの間にかいたアंकが野次を飛ばす。彼がこちら側に来たことを考えると、どうやら、いつの間にかガタキリバヤミーは逃げていたようだった。

「璃朱ちゃんが無事だったんだ。別に良かったじゃないか」

アंकがそういった態度をとるのはよく知っていたものの、映司はムツとした様子で言い返す。

「ハッ……相変わらず甘ちゃんだな……死にかけといて、よくもそんな台詞が吐けたもんだ」

「おい、アंक！」

「……今回のヤミーはマジでやばい……そんなんじゃ、本当に死ぬぞ。嫌なら、自分をもっと大事にするんだな」

アंकの嫌みを受け、映司は黙り込む。だが、その嫌みの中に隠された、遠回しな気遣いにも、彼はきちんと気付いていた。

「次に、奴が出てきたら確実に潰すぞ。あれは、かなりメダルを稼げるからな……」

そう言いながら、アंकはその場を後にする。

相変わらずメダルのことしか、言わない彼だが、なんだかんだ言っても、映司に気を遣っている。メダルを稼ぐ手段としか考えていないだろうが、それでも映司は少し嬉しく思っていた。

「あの、映司さん……」

「ん？」

「さっきの怪物って……」

「あ……」

璃朱の問いかけに、映司はしまったという表情を浮かべる。自分一人で行動していたため、彼女をフォローすることが出来ず、結果的にヤミーとの戦闘を目の当たりにさせてしまったのだ。

「えっと、さっきの怪物はさ……」

彼女に隠すことが不可能と感じた映司は、簡潔にだが説明を始めた。

あの怪物は、人の欲望から生まれた存在であること。

生まれた人の欲望を満たすように行動を繰り返すこと。

そして、人の欲望を暴走させた姿でもあること。

「じゃあ……あれが、私の欲望の本当の姿なんですね……」

「あれはヤミーが勝手に暴走しただけで……ほら、璃朱ちゃんの夢とは全然違うでしょ？」

「でも、私の夢から生まれたんでしょ……？」

璃朱の言葉に、映司は口を閉ざす。それを肯定ととった璃朱の口元は、少しずつ震えだしていた。

「やっぱり、私の夢は……追っちゃいけなかったんだ……」

「違うよ……」

「何が違うんですか!？」

璃朱の怒鳴り声が、周囲の空気の流れを停止させた。

そして、声をあげた璃朱は――大粒の涙を流して、泣いていた。

「散々迷って……自分が納得できる写真が撮れなくて……それをパ  
ワースポットなんてものを言い訳に誤魔化して……挙げ句の果てに、  
こんなに……こんなに、映司さんを傷つけて……」

泣きじゃくりながら、璃朱はポロポロと言葉を漏らしていく。

映司は、そんな痛々しい姿の璃朱に、何も言うことが出来ず黙って  
見ていた。

「こんな……こんな夢なんて……」

夢を追っていたことがあるからこそ、映司にも判る。

夢を追う時は何よりも一途に追うことが出来るが、その夢のせいで

付けられた傷はとてつもなく大きい。

それに一途であるからこそ、それに不安を感じた時に、人はかつてないほどに不安定になったりするものなのだ。

大きすぎる希望であるからこそ、それについて回る不安もとてつもなく大きい。映司や璃朱が追っているものは、まさしくそれだった。故に――自分の夢が他人を傷つけたという事実、璃朱は完全に自分の夢への自信を失っていた。

「……っ!!」

「……璃朱ちゃん!!」

何も言うことが出来ず、その場に居づらくなった璃朱は、その場から走り出す。咄嗟に追おうとした映司だったが、脳裏に焼き付いた彼女の涙が、映司の足を止める。

「璃朱ちゃん……」

何も出来ずに、その場に立ち尽くす映司。自分の不甲斐なさに嫌気がさした彼は、ただただ走っていく、痛々しい彼女の背中を見守ることしか出来なかった。

「……」

そんな様子を、バスから戻った、明が見ているとは知らずに……。

結局、映司はその後、一旦クスクシエに戻り、比奈に一通り事情を説明した。彼女には、璃朱のことを任せ、自分は知世子から許可を貰い、今日一日休暇を貰った。

情けない顔をしていることが、自分でも分かっていたし、こんな顔を誰かに見せながら、仕事をすることは知世子にもお客さんにも失礼だということを知っていたからである。

「……はあ……」

映司は、先程の公園を一人で歩いていた。自分でも、なぜこのような場所を歩いているのかさえも分からない。

璃朱に会えるかもしれない、という僅かな可能性もあったが、彼女がここにいるとは考えられなかったし、会った所で、何か言えるとも思えない。

- - 結局、あの時、なんて言ってあげれば良かったのか

そんな言葉が、延々と頭の中を駆け巡り、結果的に何も思い浮かばず、ただため息が募るだけだった。

「随分、情けない格好だねえ」

映司の前から、男の声が聞こえる。

「伊達さん……」

俯いていた顔を上げると、そこには「よっ」と言いながら、手のひらをあげる明の姿があった。

「彼女と喧嘩して、謝る言葉も見つからないかあ……お前、本当に情けないなあ」

小馬鹿にしてくる明に対して、映司はやはり意気消沈した様子だった。

「自分でもそう思います……ただ、今のあの子の心境を俺もよく知ってます……」

「知っていたんなら……何か言葉をかけてあげても……」

「知っていたからこそ、何も言えなかった……今、あの子はそれほど傷ついていて、誰の言葉も聞けないと思うんです。変な慰めをかけたら、もっと傷つけちゃうかもしれませんし……」

「……」

「だからといって、放っておくことも出来なくて……だから、何か言葉はないかって……」

そこまで言って、映司は「ハハ……」と乾いた笑い声をあげた。

「なんか、言っていることおかしいですね……」

そんな映司もまた、明には痛々しく映っていた。無理やりに自分を笑わせようとする、その姿を見て、明は頭を掻く。

「やっぱりね……」

「え……？」

明の発言に、映司は聞き返す。

「お前、自分を粗末に扱い過ぎ。笑いたくもないのに、無理やり笑おうとするなんて、自分をもっと悲しませるだけだ」

「あ……」

ようやく、気づいた様子を見せる映司に、明呆れかえった様子で盛大なため息を吐いていた。

「さっきの戦いといい、どうしてそこまで、自分を粗末に出来るの？」

明は、先程の戦いの映司の行動に疑念を感じていた。

意図していなかったとは言え、自分の一撃をまともに浴びた彼は、変身により強化されていたとはいえ、かなりのダメージを負っていたはずだった。

そんな状態にも関わらず、映司は生身のまま、璃朱のもとへと走り、

下手をしたら命を落としかねない行動をしたのだ。

そんな彼の行動は、あまりにも無茶苦茶過ぎていた。

- 自分を泣かせないように、行動する

それが明の活動のポリシーであるが故に、映司の自分を泣かせる行動について、明は疑問を抱いていた。

「俺は……他の人達が傷つくのは、嫌だって感じるから、です……」

明の問い掛けに、映司はそう返していた。だが、明にとってはそれは想定外だったようだった。なにせ、あまりにもお手本すぎる内容だったのだから。

「けど……」

だが、映司は言葉を続ける。

「一番は、俺が後悔したくないからですかね……」

「後悔……?」

映司の言葉に、明は眉を寄せる。

「実は……俺、どうしても助けたかったのに、助けられなかった女の子がいたんです……」

映司は、その言葉を重々しく繋いでいく。

- -そして、映司が紡ぎ出すのは、映司が無茶苦茶な行動を繰り返すようになった、あの出来事の詳細だった。

・ ・ 今から、一年……否、二年程前の話だろうか。

映司が、例の男性を捜しに、世界中を旅していた時だった。

『青空を、すごく嬉しそうに眺めていた』

そんな彼は、青空の見える場所を目指して旅をしていると考え、映司もまた、ひたすらに青空を求め続けた。

時には、水の綺麗な都。

時には、急な傾斜が続く山岳地帯。

時には、木が生い茂った密林の中。

時には、生命の欠片さえも見つからない広大な砂漠。

常に危機と隣り合わせな毎日を、映司はなんとか過ごして、世界中を渡り歩いていた。

・ ・ そんな毎日の中、映司はある地域に足を踏み入れていた。

そこは、とある紛争の渦中にある、小さな民村だった。

そこを訪れたのは、全くの偶然であつた。

その村が次の目的地に向かう途中にあつたからなのか、不慣れな言

葉による会話で聞き間違えてしまったからなのか、理由はいくらでも思い浮かんだが、結局の所、思い浮かんだ事柄全てがそれだったため、映司はそれ以上考えるのは止めた。

「……」

紛争地域の民家の中を、映司は歩いていく。前の街の洋服屋で調達した旅用の洋服を着た映司は、その地域の人達の目には妙に栄えて映り、中には映司を嫉妬しているような目で眺める者もいた。

そんな人達を見て、映司は言いような知れない感情を抱く。

「みんな、全然笑ってない……」

後々思い返してみても、それはあまりにも不謹慎な感想だと思った。紛争地域を、あくまでも知識の面のみでしか知らなかった映司にとって、咄嗟に出てしまったその言葉は、むしろ必然だったのかもしれない。

いつ、襲われるかもしれない恐怖や、これから先、生活が出来るか判らない不安に駆られ、それでも生活している彼らの目はストレスと疲労により、恐ろしいほどに血走っていた。

「ここに長居するのは、ここにいる人に迷惑がかかる

明日……今日のことさえも、まともに見えていない彼らと共にいることは、更なるストレスを与えかねない、と映司は考えたのか、村を早々に立ち去ろうとした。

- きゃ ああああああ ..... !

その矢先に、村の反対側から、悲鳴が聞こえた。

それは村人達にも聞こえたのか、まるで火が広がるかのように、騒ぎ声が大きくなっていく。

「.....っ！」

そんな村人達の間を映司は一目散に走り出していた。

悲鳴を頼りに映司がたどり着いたのは、村の後ろに広がっていた巨大な運河だった。噂で聞いた限り、この運河は普段は流れが穏やかなものらしいのだが、ここ最近の大雨で急流となっており、近付く ofs へも非常に危険だった。

その運河のほとりに、男性と女性の二人がいた。男性は運河に向かいながらしきりに叫び、女性は力無くその場に座り込んでいた。

「大丈夫ですか！？何があっ たんですか！？」

二人のもとに駆け寄った映司は、二人に問い掛けるが、パニックに陥った二人はまともに返事を返さなかった。

その二人の視線を、映司はたどる。

- - 映司の視線の先には、急流の中、必死に大木にしがみついた少女がいた。

「.....っ！！」

その光景を見て、映司は息を呑む。

なぜ、このようなことが起こったのか。

そんな疑問は、映司には浮かばなかった。

それよりも先に浮かんだのは、この事態をどうすべきか、ということだ。

少女がしがみついている大木の耐久性、少女の残りの体力――そして、何よりも問題なのは、この急流の速さである。

この速さは、世界の一部を巡ってきた映司も見ただことがないほどのものであるのだ。それだけならまだしも、河の深さが全くもって未知であるため、下手に飛び込めば、少女を助ける前に自分が土左衛門になってしまう可能性が高い――何しろ、地元の人達が安易に飛び込めない状況なのだ。事態は自分が思っているよりも、はるかに複雑なものであることは間違いない。

だが、これ以上長く考えることも出来ない。大木にしがみついている少女の体力は既に限界であろう。彼女がこの急流になんとか耐えている間に、最低でも彼女のもとに向かわなければいけないのだ。

――そんな考えが、堂々巡りとなっていた最中、事態は最悪のものへと変貌した。

彼女がしがみついた大木が、ミシミシと悲鳴を上げながら、急流に押され始めたのである。

「……っ！」

その光景に、男性、そして映司は絶句した。女性はそれを見た瞬間、気絶してしまい、男性はなんとか彼女を支えながら、流されつつある少女を見つめる。

急流によって、持っていかれる少女の泣き声。

だが、それでも聞こえてくる泣き叫ぶ少女の声が、痛々しく映司の胸に響き渡る。

その響きを聞いた瞬間、映司の頭と心の中から迷いが消えた。

迷いが無くなった身体は、急に動き出し、映司はその勢いのまま、急流の中にその身を放り込んだ。

「ブハアッ！！」

急流を全身で受け止めた映司は、その衝撃により、体中が硬直してしまった。これでは身もふたもないと感じ、顔をなんとか水面から出すが、その間にも、水流は容赦なく自身を流していく。

少女がしがみついている大木に目をやる。

大木はなんとかその場で踏みとどまっている様子だった。だが、それにしがみついている少女は、腕に加わる負担の変化に耐え切れず、今すぐにも大木から手を離してしまいそうだった。

映司は、水流に抗いながらなんとか、体を前に前にと、水をかき分

けていく。必死に、何も考えずに、大木に向っていく。

そして、大木のちょうど上流側に来た映司は、大木に向って流れに身を任せる。自身が大木にぶつからないように、その勢いをなんとか調整しながら、確実に大木に近づいていく。

そして――ようやく、映司も大木にしがみつき、少女に手を伸ばし、その腕を掴み取り、自分のもとに引き寄せると……

「もう……大丈夫だからね……」

途切れ途切れに、映司は言葉を紡ぐ。そして、彼女を安心させるように、映司は飛び切りの笑顔を彼女に向けた。

「ふえ……ワアアアアア……」

映司の笑顔を見た彼女は、心底安心しきったのか、大粒の涙を流し始める。そんな彼女を見た映司もようやく安心しきった顔を見せ、岸の方を見つめる。

そこには、命綱をつなげた村人がこちらに向かって泳いでいる光景があった。命綱をつなげられた屈強そうな男性に、映司は自分が助け出した少女を引き渡そうとした。

この急流の中、二人を同時に運ぶのは命綱を結んでいても危険、という判断なのだろう。それを感じいた映司は、自分よりも幼い少女を優先したのだ。

それを理解した屈強な男性もまた、いち早く戻ってくることを目で映司に伝えながら、少女を引き取り、岸へと戻っていく。少女より

も体力のある映司は、大木にしがみつき、その様子を見守っていた。そして、岸に男性がたどり着き、少女が先ほどの男性と女性のもとへと戻っていくのを見ると、映司は危機的状況の中でも心底安心した。

- -それが、映司の油断へと繋がった。

「あ……れ……？」

安心感の中、映司の腕から力が抜けてしまった。油断したからもあったのだろうが、慣れない旅のせいで映司の体には大きな疲労が確実に蓄積していたのだろう。その中で水に濡れて、大幅に擦り切られた体力は既に限界だったのだ。

急流に流され、岸が遠ざかっていく。

男性も。

女性も。

自分が助け出した少女も。

その影が見えなくなるほど、一瞬で流されてしまう。

- -ここまで……か……

無意識に、映司は悟る。諦めが映司の中で生まれたせいか、彼の体は徐々に水中へと沈んでいく。

- -結局……あの人に会えなかったな……

水中の中で、徐々に狭まっていく視界の先に、あの日の光景が浮かぶ。顔を覚えていないが、それでも感じる温かさや心地よさに身を委ねながら、映司は意識を手放していた。

「……ん……」

それから、どれほどの時間が流れたのか。映司はようやく、目を覚ました。

「……ここは、天国……？」

そんなことを感じながら、力が入らない体になんとか鞭を打ち、体を起こす。

すると、一人の少女と目が合う――忘れるはずもない、大木にしがみついていた、例の少女だ。

「君は……」

それを言おうとした瞬間、映司は気付く――彼の周りには沢山の人が、皆、映司を心配そうに見つめていることに。

そして、映司が完全に目を覚まし、体を起こすと、人達はお互いに手を叩き、喜び始めたのだ。

「え……と……」

事情がわからず、映司はただ困惑するだけだった。

「目が覚めたか……？」

そういいながら、映司の目の前に40代前半ほどの男性が現れる。その後ろには30代後半の痩せ型の女性が付き添い、その後ろには先程の少女がついてきていた。

この男性も、この女性も覚えている。川辺で、少女を心配していた二人だ。

「あの時から、君は溺れてずっと意識を失っていたんだ……」

かなり不安定であったが、彼は日本語を話すことが出来たらしい。映司にとっては、不幸中の幸いであったが、今は何が起きているのかを確認することが先だった。

「俺……そうだ、確か河で、その子を助けようとして、それで……」

「あれから、丸二日は寝ていた……」

「え……そんなに、ですか？」

男性の発言に、映司は目を丸くして驚いた。あの河の中で感じたが、

自分の中には相当大きな疲労が蓄積していたようだった。自分のことに関してはしっかり気を配っていたつもりだったが、肝心なところで、しかもこのような地域の人の迷惑になってしまって、映司は気恥ずかしく感じた。

「本当に、ありがとう。娘を助けてくれて……」

そういつて、男性が映司に向って頭を下げてる。それに続いて女性、更には、外から見守っていた村人達からも頭を下げていた。

「この子は、私達の唯一の子供でね……ずっと子供を持てなかった私達に、ようやく出来た子供なんだ……なんと御礼したらいいか……」

「そんな……頭を上げてください……俺、そんなに大したことではないですから……」

頭を下げている村人達に向かい、映司は戸惑いつつも、何とか頭を上げさせる。その後、映司はこの家の主人である男性といくらか話をした。

ここは、どのような場所なのか。

自分がこれまでどのようなことをしていたのか。

目的の場所は、どこにあるのか。

小一時間ほどの話を終え、情報がいくらか纏まった映司は、速やかに身支度を整えようと立ち上がるうとした。

だが……。

「つつ……！！」

映司の右足に痛みが走る。右足を見ると、深くはないが、大きな裂傷があつたのだ。一応、手当てはされているようだが、傷口はいつ開くか判らないほど不安定であつた。

男性の話からすると、あの急流に流されてきた木の破片により出来たものらしい。現在の状態だと、旅に出て、傷口は長くは持たないということらしい。そう思った映司はどうしたものか、と考えを巡らせる。

すると、家主の男性から意外な言葉が出された。

「傷がある程度治るまで、ここにいないか？」

「え……？」

その発言に、映司はしばらく驚いていた。仮にも、ここは紛争地域ということもあり、明日はおるか、今日の食料や寝床の確保すらも難しい場所のはずだ。それを言い出すことは、自分達はおるか、映司の分のそれを用意するという他に他ならないのである。

- - それは、この村人達の命を削ることに、他ならない行為でもある。

そう感じた映司はその申し出を断ろうとしたが、自分の状態や今後の旅のことなどを考えると、旅に対して未熟な映司にはどうにもその決断を下すことが出来なかった。

「いつしよに、いようよ」

決断を渋る映司に対して、言葉をかけたのは家主の娘だった。父親の真似事で覚えた日本語は、父親よりも舌足らずで、日本語を母語とした映司でも聞き取るのがやつとのものだ。

「え？」

「いま、おそとあぶないよ。おにいちゃん、けがしてるのにいつちやったら、しんじゃうかもしれないよ。そんなの、ルウいや」

ルウ、という名の少女は、映司のもとに近づきながら、まるでお願いと言っているかのように、映司に言う。

それに対し、映司は複雑な感情を持ちながら、ルウを見ていた。

「…こんな、小さな子まで、今の状況を理解しているんだ……」

映司が育った日本なら、普通に遊び、普通に笑っているはずの少女までもが、生死を賭けてここで生活している。このような世界を知らなかったことに恥じながらも、映司は純粹に彼女の生きようとする姿に、胸を打たれていた。

「……どうか、ほんの数日だけでも、休んでいてくれ……この子のためにも……」

後押しするように、家主の父親がルウの頭を撫でながら呟く。彼の言っていることの後半の部分は、映司には判らなかったが、この状況では断るに断れなくなってしまうていた。

「……じゃあ、怪我がある程度治るまで、よろしくお願いします」

その発言に、家主の男性と妻である女性はホッと胸を撫で下ろす。映司が村を出て行つて、紛争の流れ弾を食らわないで済んだことに、何よりも安心したのだろう。

映司は、こんな境遇にも関わらず、人のために何かをすることが出来るこの家族に純粋に感動していた。

その中で、ルウはただ一人、ポカンとしていた。映司の言った言葉の意味が、あまりよく判らなかつたらしく、両親と映司の顔を交互に見つめている。

「おとーさん」

「ん？なんだ？」

「おにいちゃん、でていくの？」

寂しそうに、呟くルウに対し、父親は優しげな笑みを浮かべながら、こう言った。

「いいや、おにいちゃん、しばらくここにいるんだって」

その言葉を聞き、ルウの顔がパアと明るくなる――その表情は、この場所が紛争地域であることを忘れさせるような、年相応の女の子の笑顔だった。

「ほんと！？」

「ああ、本当だよ」

「やったあ!!」

笑顔浮かべながら、部屋の中を走り回り、全身で喜びを表現するルウ。やがて、表現を終えたルウは映司が座ったベッドのもとにやつてくる。

「おにいちゃん、ルウはルウって名前だよ」

無邪気な笑顔に、映司もまた笑みをこぼす。

そして、思う。

・・・この笑顔を守れて、本当に良かった、と。

「えいじ……」

そして、映司は自分の名前を告げる。

「俺の名前は、火野映司」

「エイジ……?」

「うん、映司」

「エイジ!!」

「よろしくね、ルウ」

お互いに名前を呼び合う二人。

重なりあうことのなかった偶然が重なり合い、二人の絆が、生まれた瞬間だった。

そして、それが映司にとって最も残酷な運命を呼ぶ必然であることも、映司自身は知らず、映司はこの出来事に純粹に喜んでいた。

映司が紛争地域の人々と過ごすようになり、（眠っていた2日を除き）2日が経過した。

あれから、ルウの家族と共に条件付きで過ごすことになった映司はというと……。

「暇だ……」

家族に貸し与えられたベッドの上に寝転がりながら、石で出来た天井を見上げていた。

「疲れのせいで、熱を出すなんて、ついてないなあ……」

- - 映司が目を覚ました翌日、まだ取れていなかった疲れのせいで、映司は熱を出していた。家族の話だと、眠っていた2日間はもっと高い熱を出していたそうだが、元からあった体力のおかげで、なんとかここまで回復したらしい。

ある程度回復はできたものの、今の映司にはできることなど、何もなかった。暇を持て余すということは、徐々に元氣を取り戻しているということなのだが、動かないことは性に合わないのか、映司はゴロゴロとベッドの上を転がっている。

「ただでさえ、迷惑かけちゃったのに、お世話になるなんて……ホントに申し訳ないよな……」

元氣を取り戻すに従い、徐々に思考も安定してきた映司は、やはり

この家族にかかる負担を真っ先に考えていた。

川に飛び込んで溺れた自分を助けてくれただけではなく、目を覚ますまで身を置いてくれた上に傷の治療、あげくの果てには数日の同居。

ルウを助けたことを当然と思っている映司にとって、これほど親切にされると、ありがたいという気持ちよりも申し訳ないという気持ちが生えた。

かと言って、恩返しができるほど体調も優れておらず、自分にしてもらったことに相当することすらも、思い浮かばない。

結局のところ、体調をいち早く治し、これ以上の迷惑をかけないようにするこしか出来なかった映司は、ゴロゴロとひたすら寝返りを打っていた。

「けど、戦争している所って、こんな感じで生活してるんだな……」

ほんの少し体を起こし、辺りを見渡す映司。

コンクリートで出来た家は、度重なる襲撃の流れ弾で風穴がいくつも空いており、部屋の床……というより地面から生えてくる雑草は、戦地特有の空気に触れ、成長してきたせい、緑色よりも茶色の葉が多く、地面もひび割れている。

また、映司が今使用しているベッドの布団も、節々から綿がはみ出ており、布もかなり黄ばんでしまっていた。

「……」

映司は以前に、戦地に関する写真を見たことがあったが、現実の光景は、知識上の光景の全てを凌駕していた。

映司が知っていた普通さえも、この場所では非常に困難な出来事となる。

食べ物を食べることも。

水を飲むことも。

安心して眠ることも。

自分の思いつく限りの全てを、命懸けで行わなければならない

現に、この家で出される食事や生活状況は自分が想像していたものよりもずっと厳しいものだった。

毎日の食事の量は決して多いことはなく、少ない時には数少ない野菜を煎じたスープ一杯だけの時もあった。

だが、映司はその生活には特に苦を感じていなかった。これまで送ってきた不慣れな旅は、ここの食事よりももっと厳しいものもあつたし、何よりも野宿とは違い、過ごしやすい家がある。裕福な暮らしをしていた自分には気付かなかっただろうその幸福に、今の映司はほんの少し誇りを感じていた。

- - それ以外にも、映司に苦を感じさせない出来事があつた。

「エイジ、お薬の時間だよー」

そう言いながら、部屋に入ってきたルウは、小さな瓶を手に持ち、映司に近づいてきた。

- 傷を負った映司を世話していたのは、ルウであった。

ルウの両親は、一日分の家族の食料と水を得るために、日中は家にいることがなく、留守番を頼まれていたルウがこの役目を頼まれたのである。

映司の傷口に薬を塗ることはもちろん、映司の食事を持ってきたり、時には映司の体を拭いたりもするなど、現在の映司の身の回りの世話をほぼルウひとりが行っていたのである。

「ルウ、いつもありがとう」

「んーん、気にしないで。エイジには早く元気になって欲しいもん」  
無邪気に笑いながら、映司の足に巻かれた包帯を解いていくルウ。  
すると、そこからは映司が負った傷跡が顔を見せていた。

若干、生々しさを感じるものの、傷口は完全に塞がっていた。あまり傷口から菌が入らなかったことも勿論関係しているのだろうが、何よりもルウの治療があったからであろうと映司は実感していた。

「傷、だいぶ良くなったね」

「うん、ルウのおかげだよ。本当にありがとう」

そう言うと、映司はルウの頭を優しく撫でてやる。ルウは気持ちよさそうに目を細め、嬉しそうに微笑んでいた。

「じゃあ、そんなルウに、今日もおはなししてあげようかな」

「やった！おはなし、聞きたい！」

映司の発言に、ルウはバンザイをしながら、両目を輝かせていた。

- 映司が目覚めた日から、話し相手になっていたルウは、映司のはなしが楽しみとなっていた。日中は両親がいなかったため、ルウ自身が寂しい思いをしているに違いない。そんなルウの話し相手に映司がなったのは、その状況下では、むしろ必然だったのだろう。

とくに昨日なんかは、外から帰ってきたルウの両親が止めに入るまで、映司はルウに話をせがまれていた。病み上がりの体には、相当負担がかかったのか、映司は昨夜グッスリと眠れたことは余談としておこう。

「じゃあ、今日は……学校の話をしようかな」

映司が話すものは、自分の母国である日本のことや昔話を始め、これまで旅をしてきたそれぞれの国々のことだった。

この国以外のことを何も知らないルウにとって、映司の話している内容は、まるで絵本の中の魔法と同じような、感覚だったのかもしれない。

不思議でたまらないが、実際に見てみたいもの。

ルウにとって、それは未知のものから、憧れに変わっていく瞬間だ

ったのだろう。ルウが映司の話を聞く際は、日本にいる子ども達と何も変わらない、キラキラとした瞳で聞いていたのである。

- - だが、それは昨日までの話である。

「そこで、子ども達は振り返るんだ……ところが、そこには誰もいない……」

「……」

「不気味に思いながらも、子ども達は歩みを止めずに歩いていく……しかし、それでも子ども達とは別の足音が子ども達の後ろや前、天井や床から跳ね返ってくるんだ……」

「……」

「やがて子ども達は恐怖のあまりにとうとう止まってしまった。それでも鳴り止まない足音は、やがて子ども達の頭の中にまで入ってきて、延々に頭の中で響いていく……いつまでもいつまでもいつまでもいつまでもいつまでも……それから、その子達はどうなったと思う……?」

「……どうなったの……?」

張り詰めた空気の中で、ルウは真剣な表情で、映司の表情を見つめる。

「その子ども達は、いつまでも聞こえる音に耐えきれなくなって、だんだん頭がおかしくなっていくんだ……そして、こういった結論に至ったんだ……『音が聞こえる耳なんか、なくなってしまえば

いい……！』……そして、子ども達は自分の耳を切り落としてしまい、そのショックで、誰もかもが死に、その噂に近づいたものは誰もいなくなった……これで、お終い」

張りつめていた空気を緩めるように、映司は胸の前で手を合わせた。だが、映司は話を言い終えたことよりも、気まずい雰囲気の流れていたことに、意識を持っていかれていた。

ルウへの話の途中までは、確かに日本の学校についての話だった。そこから、どういった流れになったのか、学校の七不思議の話題になり、いつの間にか、先程の怪談話に至ってしまったのだ。

内容は、大雑把に言えばこうだ。

ある小学校に、噂好きな子供達がいた。子供達は、最近噂になっていた七不思議の一つである『無限廊下』という場所に行くことを決めたのである。

『その廊下を歩いた者は、その廊下に巣くう亡霊の足音を聞く。そして、亡霊に取り憑かれ、延々とその廊下を歩き続ける。廊下の亡霊達の足音と共に』

早い話が、その廊下を歩くと自分達のものとは違う足音――すなわち、亡霊の足音が聞こえ出す。そうなると廊下が延々と続く場所に連れて行かれ、自分達もその亡霊となり、廊下に足音を響かせながら歩き続ける、といった内容の七不思議だった。

子供達は、そのあまりある好奇心を抑えきれず、その七不思議の場所へと向かってしまい、その後は……映司の語りのような悲劇におそわれてしまう、と言った怪談話だった。

それを見事に言い終えた映司の脳内を一言で表すならば――『やりすぎた』。

いくらルウが話して欲しかったとはいえ、4、5歳になる女の子に話すような、内容ではないのだ。映司は、テンションのままにこの話をしてしまったことを、話終えた時になって、ようやく後悔を覚えたのである。

――だが、ルウが次に言った言葉は、意外な言葉だった。

「……日本には、そんなお話もあるんだね」

その話に臆するわけでもなく。

恐怖のあまり、泣き出すわけでもなく。

あまりにも、あっさりと、感想を口にしたのだった。

「えっと、ルウ……今の話、怖くなかったの？」

ルウの、あまりにも意外すぎる言動に、映司は内心、戸惑いながらも、ルウに問う。

「怖い……って言うよりね」

「ん……？」

「かわいそう……かな」

かわいそう。

ルウは、そう言った。

「かわいそう……？」

「だって、お話の中の子ども達は、誰も知らない場所に連れて行かれちゃったんでしょ？ 誰にも知られずに死んじゃうって……すごく寂しいよね」

「……」

「廊下の亡霊達も、どこから来たのか判らないけど、誰にも知られずにいるんだよね……？ どこにも行けずに、誰にも声が届かずに、歩き続けてる……そんなの、悲しすぎるよ」

ルウの発言の一つ一つに映司は驚き、胸が締め付けられていた。

ほんの4、5歳の女の子が、どうすればこのような考えを持てるのだろうか。

ほんの4、5歳の女の子が、どうして、こんなに悲しそうな顔をして、話せるのだろうか。

- - 戦争。

映司が知らなかった世界。それが、その質問の答えだった。

戦争は、悲劇しか生まない。

誰かが死ぬ。

生き残っても、突如目の前に迫る他の人の死は、人々の心に大きな傷と恐怖を与えていく。

悲劇が悲劇を呼ぶ世界しか知らなかったルウは、この世界が他の世界そとがわから見られていることさえも知らないだろう。

誰からも見られることのない世界。

ルウは、無意識のうちに、その怪談話の中の子供達と、自分を重ね合わせていたのだ。

「ねえ、エイジ……」

「ん？」

「エイジはさ、色んな国を渡ってきてさ……楽しかった……？」

ルウの質問に、映司は息が詰まるような感覚を覚える。

正直に言つと、映司は世界を楽しむために、旅をしていたわけではない。自分を救ってくれた青年を捜し、御礼を言うことが彼の旅の目的だったからである。

その旅の先々で、色んな発見があった。

知らなかった世界を見ることが出来て、確かに嬉しかった。

だが、それよりも、青年と会うことが出来なかったことが、映司にとっては大きかった。その度に大きく肩を落としたことは、今でもよく覚えている。どちらかと言えば、この旅は落ち込むことが多いのかもしれない。

故に、映司はお世辞にも自分の旅が楽しかったとは、言い難かった。しかし――。

「……楽しかったよ」

ルウの前では、そのことを言わなかった。

正直に言ってしまうえば、ルウの心から知らない世界への憧れが消えてしまうかもしれない。

これからの毎日が、より暗いものになってしまうかもしれない。

映司は、それが嫌だった。

戦争という悲劇の世界の中でも、映司と共に過ごしてきたルウを。

その世界で、純粹に笑っているルウの他の世界への憧れを。

映司は、自分の発言で、つぶしたくなかった。

「……ほんと？」

「うん、本当だよ。俺の知らない世界が一杯あって、俺はその世界に触れたり、見るのが好きなんだ」

嘘ではない。

本当でもない。

虚実の中に真実を混ぜながら、映司は言葉を紡いでいく。

ルウの気持ちを踏みにじらないために。

ルウの笑顔を、消さないために。

「そっか……」

映司の言葉を聞いたルウは、先程までの悲しそうな表情はどこへやら、もとの笑顔に戻っていた。

「決めたよ、エイジ」

映司の方へと向き直り、ルウは言う。

「この戦争が終わったら、私も色んな世界を見に行きたい」

屈託のない笑顔で、ルウはそう言った。

映司の話で、この世界とは、違う世界を知ったルウは、その世界をみたいという夢を抱いていた。

そんな彼女の笑顔を見て――映司は心が強く痛んだ。

「そうだね……」

痛みを隠すように笑う映司。

それでも、映司はルウが笑い続けるために、懸命に笑顔を装った。

「いつか、叶うといいね」

ルウがこの世界で希望を持ち続けるために。

この世界で笑顔で居続けるために。

映司は、嘘をつく。

――その時の映司には、誰かを救うことができる力も、知識も、経験も、なかったのだから。

それから、数週間が経過した。

映司の熱はすっかり下がり、疲れも取れ、体調も万全となっていた……が、その瞬間、内戦により、村が襲撃された。

懸命に、避難をする村人達に混ざりながら映司も避難……というこ  
とはせず、彼は数年間で育んだリーダーシップと行動力で、村人達  
の避難を誘導していた。その彼の指揮能力により、村人は誰一人怪  
我することなく、避難させることが出来たのである。

その功績が評価され、映司は村人全員から慕われる存在となってい  
た。

当の本人も、村人達が無事だったことに加え、お世話になった礼を  
果たせたことに、多少なりとも嬉しさを感じていた。

だが、日にちを追うごとに、内戦の激しさは増していった。映司も  
必死に対応するものの、怪我人は日を追う毎に少しずつ増えていっ  
た。

怪我で済んだ村人達は、映司に礼を言うが、映司自体はそれを快く

思わなかった。

自分のせいだ、と強く自分を責めてみても、内戦は待ってくれず、更なる怪我人を呼ぶだけだった。

それを見た映司は、絶対に守り抜いてみせると強い意思を持ち、映司なりの戦いとして、村人達を守り抜いていった。

そして、内戦のないある日のこと。映司はルウの父親と共に、水を汲みに行くことになった。

その場所は、村から数km離れた場所にある、戦争の影響を全く受けていない、鍾乳洞だった。

硝薬を含まない純水のたまり場には、いつの間にか住んでいた魚達の巣窟にもなっていた。

水を汲むだけではなく、その魚を捕った方がいいのでは、と映司は問うたが、この魚は警戒心が強く、とてもじゃないが捕まえられないらしい。

それに加え、魚を持って帰る際に魚の水しづきが垂れてしまったら、この場所が戦争国により無くなってしまう可能性もあった。

そうなれば、水を確保することは一層難しくなってしまう、生き残る可能性も、一気に低くなってしまふらしい。映司は、戦争地域の

食糧や水の確保にも、そうした工夫点があることに関心を抱いていた。

「もう、体も大丈夫そうだな」

水を汲んだ帰り道。ルウの父親が、映司の身体や足取りを見て、そう言った。

「はい、お陰様で」

それに映司は笑顔で応える。身体に溜まっていた疲れも全て取れ、身体は軽やかに感じた。そのせいもあり、今の身体には力が溢れてかえってくる感じだった。

そんな映司の様子に、ルウの父親も穏やかな表情だった。常に厳格な表情をしていた彼も、映司の体調が気がりだったようで、頻繁に映司の面倒を看てくれたのである。

「じゃあ、もう旅立つのだな」

溜め息を吐くように、ルウの父親は言う。

その一言が、映司の耳に重く突き刺さっていた。

「はい……」

映司の体調はすっかり回復した。

それはつまり、映司の旅立ちが間近だということだ。

そのことを、映司はしっかりと理解していた。

「寂しくなるな……」

「……」

ルウの父親の言葉を前に、映司は無言だった。

- - 偶然に偶然が重なった出会いのはずだった。

この家族と、同じ屋根の下で過ごしたことは、この二人も、今家で留守番をしている二人も、村の全員も想像したことがない出来事のはずだった。

それなのに、まるで家族のように過ごした数日間、映司の中で非常に大きな存在へと変わっていた - - そこから離れることに抵抗を覚えるほどに。

- - なんか、言ってること、滅茶苦茶だな……

映司は、皮肉に思う。

迷惑をかけないようにするために、すぐにも立ち去ろうとした自分が、それに抵抗する気持ちも抱いている。

結局、映司はこの家族に抱いた温かさに身を委ねてしまっていたのだ。

故に今、映司は近づいてくる別れが煩わしく感じていた。

「……君には、本当に世話になった」

黙りきった二人だったが、突然、ルウの父親が口を開く。

「え？」

「いくらお礼をしても足りない……君が、来てくれて本当に良かった」

「……それは、こっちです。本当に、色々とお世話になって……」

「君は……！」

穏やかだが、強さのこもった口調で話す彼の前に、お礼を言おうとした映司の口が止まった。

「君は……ルウに笑顔を与えてくれた……」

「……」

そこまで言うと、彼はまた歩き出す――その大きな背中が、映司には、とても哀しげに映った。

「あの子が産まれて、三年目だったか……この辺りで、紛争が始まった」

ポツリポツリと話し始める彼の言葉を聞き漏らさないように、映司は耳をすませる。

「それまでは、私達は普通に生活していた。やっと出来た子供に四苦八苦しながら、なんとか毎日を乗り越えてきた……幸せな時間だった」

「……」

「戦争が始まったら、そんなことを考える時間もなかった。どうすれば、生きられるか。どうすれば、妻を、ルウを守れるか……自分はそれをずっと考えてきた。」

「……」

「だが、それだけだった……結局は、ルウに何一つ教えてやることが出来なかった。他の国のことも、広い世界のことも……戦争という理不尽な世界の中で生きる術しか、教えてやれなかった……」

映司は、思い出す。

この数日間、他の国のことを、ルウに話していたこと。

父親の言う通り、ルウはそのことを知らなかった。

知っていたのは、戦争だけだった。悲しみを生むことしかない世界、ただひとつを、誰よりも知っていた。

そんな世界で、ルウは少しでも笑えたのだろうか？

答えは分かりきっている。こんな世界で笑える人間など、全世界を捜しても、いるはずがない。明日死ぬかもしれない今日を、笑って過ごせる人間など、誰もいないのだ。

「……だが、君はこんな世界じゃない世界を、ルウに教えてくれた。世界が悲しみばかりで溢れていないということを……笑顔で溢れている世界があることを……」

- ルウと触れ合った日々の中で、映司は沢山のルウの笑顔を見てきた。

その時の映司は、こんな毎日の中で笑ってられる彼女は、本当に強いと思っていた。

だが、違った。

彼女の強さだけではなかった。

映司が、彼女に笑顔を与えていたのだ。

『どっちかが笑顔だとさ、もう片方も笑顔になれるよね』

自分を変えた青年の言葉が蘇る。

あの時、青年がしてくれたことを、映司は無意識のうちにしていたのだ。

『……どうか、ほんの数日だけでも、休んでいてくれ……この子のためにも……』

同時に、映司は自分を説得した時の彼の言葉を思い出していた。

この子のため。

戦争以外の世界を知っていた映司が、ルウに何かを教えてくれるかもしれないと感じたのだろう。この世界以外のことを知り、少しでも世界に希望を持つて欲しいと思っていた両親にとって、映司はまさしく適役だった。

そして映司は、知らず知らずのうちに、それに応えていたのだ。

「本当に……君に会えて良かった……」

改めて、映司に向き直り、ルウの父親は礼を言う――それを言う彼の目からは、涙が流れていた。

「……」

彼の言葉は、映司の胸に強く突き刺さっていた。

自分にとって当たり前のことが、この場所では当たり前じゃない。

当たり前のことが出来ないこともあった――だが、当たり前のことをしてあげること、他の人を笑顔に出来ることもあった。

笑顔を守るために、嘘をつくことしか出来ないと感じていた映司にとって、そのことが何よりも嬉しかったのだ。

「パパー、エイジーー!!」

歩き続け、いつの間にか村の近くに来ていた二人を呼ぶ声が村から

聞こえた。

その声の主は聞かなくても判る――この村の中で、一番仲良くなった少女のものだ。

「ルウ、ただいま」

「おかえりー！ねえねえ、手を出して！」

ルウの視線に合わせて屈んだ映司に、しきりに手を出すように言うルウ。それにつられ、映司はそつと手を出す。

待っていると、映司の手の中に、ルウは何かを乗せた。何かと思つて、映司は手のひらの上に乗ったそれを見る――そこには、白く、まるく整えられた手のひらサイズの饅頭のような食べ物があつた。

「今日はね、ルウもお手伝いしたんだよ。エイジのそれは、ルウが作つたやつなの！」

笑顔で話すルウは、楽しげだった。その笑顔に、映司もまた、ルウへと笑みを返す。

「ほんと？凄いなあ」

「えへへ……エイジにはそれを食べて、元気に旅立ってほしいもん」  
笑顔だった映司は、その発言を聞き、驚きの表情へと変わった。

「ルウ、知ってたんだ……」

「うん、もちろん。だって、エイジはもともと旅をしてたんでしょ？」

「うん……」

「じゃあ、早く新しい所へ行きたいでしょ？」

その言葉に、映司は言葉を詰まらせる。

「私ね……エイジがいてくれて、凄く楽しかったし、嬉しかった。いっぱいあって、数え切れないくらい」

「……」

「だからね……これ以上、甘えちゃいけないと思ったの。エイジはここで終わりじゃなくて、もっと色んな世界を見に行くんでしょ？ だったら、私達のことは気にしないで」

「でも……」

「大丈夫……」

強く、凜とした声で言う。

「私には、パパもママもいるから、全然寂しくないし、エイジとまた会えるもん！だから……エイジも笑って、行って欲しいの」

言われて、気付く。少女は、笑っているだけではない――両の瞳が潤んでいるのだ。

自分は、この少女の強さを知っていたはずだった。

強さを知っていたのに、辛さを必死にこらえる強さを知っていたのに、映司はそれを踏みにじろうとしていた。

自分の愚かさに気づきながら、映司は決意した――彼女の優しさに、応えることを。

「……判った、俺、また旅に出る」

それを、ルウに伝える。するとルウは、ホッとした様子で映司に話しかけてきた。

だが……、彼女の頬を、透明な滴が伝っていた。

「頑張ってね」

「うん」

「また、会いにきてね」

「うん」

「もう……怪我しちゃ、駄目だよ」

「……うん」

「かぜも……ひかないで……ね……」

「……うん……」

「また……おはなし……きかせてね……」

「……うん……！」

- - 結局、二人は涙をこらえることが、出来なかった。

だが、最後の最後まで、二人はお互いの真正面から向き合い、笑い合ってきた。

それは、この瞬間でも変わることはなかった。

住む世界が違った二人の、お互いの気持ちは最後まで変わることなく - - 再開の約束を交わしていた。

それから、数時間後 - - 映司は村から、十分ほどの場所を歩いていった。肩には旅の相棒であるショルダーバッグと - - 明日のパンツを引っさげた棒を掲げていた。

「……」

映司は、振り返る。視線の先には、数週間、共に過ごした村があっ

た。

村人達は、無事に生きていくことが出来るだろうか？

決して、希望や笑顔を失うことなく、生きていけるだろうか？

そんな、心配が頭をよぎる。

「……」

映司は思う。

この村の人達は、自分が来るまで、笑っていなかったこと。

たった一家族だけだったが、その家族に、何かを残してあげることが出来たこと。

- -ほんの少しでも、自分に何か出来ることがあるなら、それをやりたい

- -こういった地域の人達を、助けてあげたい

いつか、再び訪れた時、笑顔で会えるようにと祈りながら、何かを手助けをしようと、強く心に決める。

そう誓いながら、映司は一步前に踏み出す。

-  
- その瞬間、  
背後の村から大きな爆発音が聞こえた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3907v/>

---

仮面ライダーオーズ 旅人と理由と二人のライダー

2011年11月17日17時58分発行